

# このせまい野原いつぱい

作・演出 萬野 展

## 登場人物

久喜玲二 三十七歳。マイティ・ワンのオーナー。(萬野展)

日月悦子 たてもり 二十七歳。「よろず相談所マイティ・ワン」アシスタント。(石田愛)

小川高広 二十六歳。楽器職人。「小川楽器工房」経営者。(松山聖一)

中山亮子 りょうしこ 三十三歳。ベンチャー企業「ユエ」社長。(佐々木智秋)

松下信夫 三十七歳。住民運動のリーダー。(早矢仕裕之)

山口佐和子 二十八歳。住民運動のメンバー。松下の右腕。(宮崎奈々)

熊野周平 三十五歳。マイティ・ワンに相談にきた男。(一村宏幸)

熊野静枝 三十三歳。周平の妻。市長の娘。(杉山美奈)

芝昌男 三十七歳。IMI日本法人代表。(籬秀夫)

水谷育馬 いくま 三十二歳。市議会選挙管理委員。(有原雅)

加藤民子 二十九歳。市役所職員。(桜かおり)

美作小雪 みまさか 三十七歳。タウン誌ジャーナリスト。(宮口恵)

【注記】当脚本の著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

夢の中でだけ ときたま思い出す

二十年も前に建てた小さく明るい家。

戦争のあとの焼野原の雑草の片隅に

建ててそのまま忘れた ささやかな幸福。

いや、そんなものは現実にはなかった。

途方もなく愚かな若者が そのころ

妊娠している幼い妻と二人で住むために

どんなに独立の巢に焦がれていたとしても。

そんな架空の住居が どうして今さら

自宅に眠るほくの胸をときめかせるのだろう

貧しい青春への郷愁を掻き立てるように？

夢の中でその家は いつまでも畳が青く

垣根には燕 庭には連翹の花

ああ 誰からも気づかれずに立っている。

清岡卓行 未刊詩篇より

# ACT 1 野原の住人

明かりが入ると、そこに、小さな野原に建っている小さな小屋がある。

プレハブ作りのようだ。

壁面には、

- ・「よろず相談事解決社ノマイティ・ワン」
- ・「有限会社ユエ」
- ・「小川楽器工房」

という三つの看板と、それぞれのロゴマークがそれぞれに薄汚れて張り付けられている。

室内は、ガランとしているわりに、よく見るといろんなものがある。

コンピュータ、工作台、板きれ、工具、心電図測定機、首のないケンタッキーおじさんの人形、などなど、雑多なものばかりである。

中央奥に、大きめのデスクがある。

デスクの上にも、雑多なものが堆積している。

そして、その部屋にふたりの人物がいる。

机の向こうの大きな椅子にふんぞりかえっている女がひとり。

机の前の小さな椅子に居心地悪げに座っている男がひとり。

ふたりはしばらく黙っている。

女1 それで？

男1 ……はあ。

女1 要するにあなた、どうしたいわけ？

男1 ……（首をかしげる）いやあ…。

女1 いやあ…って、あなた、自分のことでしょうに。

男1 そうなんですけど…。

女1 ハッキリしなさいよハッキリ。ええと…なんだっけ、クマダさん？

男1 熊野です。

女1 クマノさん。あなた、いつからウチに帰ってないって？

男1（熊野） 先週の…水曜からです…。

女1（舌打ち）子供じゃないんだからさ。とにかくウチ帰って奥さんなり、その、名前は言えないっていうお義父さんなりと話し合ったらいいじゃないの。

熊野 それができるくらいなら苦労しないんですけど…。

女1（ため息）じゃあどうすんのよ。

熊野 ですからそれをご相談に…。

女1 そんなこと自分で考えなさいよ。

熊野 だって、ここ…あの…よろず相談事カイケツって…。

女1 だから解決してるでしょ。ウチへ、帰って、奥さんと、お話し合え、しなさい。

熊野 ……話し合い…話し合っても…ダメなんじゃないかなあ…。

女1 ……（うつろりして再度ため息）じゃあ、どうすんの…。

熊野 ……ごうじまじょう。

奥の入り口から女2、登場。

女2 ……あゝ……ダルい……。

女1 亮子さん、飲み過ぎだよ。

女2 (亮子) 違うの、生理。腰が痛くってさあ……。

女1 まだあるんだ。

亮子 (怒っていきり立つ) ちょっとアంతなんてこと言つの？ そっいつこと言

の？ (弱まって) あいたたた……大声出すと腰が痛い……。

女1 仕事すんの？

亮子 するわよ、する。

といつつ亮子は珈琲メーカーから珈琲をカップに注ぐ。

女1 こっち、お客さんだからさ、静かにね。

亮子 お客って、あんなんでそんなとこ座ってんのよ。

女1 なんてってなによ。所長いなんだからしょうがないでしょ。

亮子 あんた相談なんて出来んの？

女1 客の前でなんてこと言つの？ 見なさいよ、ホラ、もうすっかり憑き物が落ちた  
ようなスツキリした顔……してる……でしょ。

亮子 ……。

熊野 ……。(軽く頭を下げる)

亮子 どっちかって言つと途方に暮れた顔してるんじゃない？

女1 ……うん。

亮子 なんていうかこう、何日もウチに帰ってなくて、さまよい歩いて行き場をなく  
した男、って感じ。

熊野、呆然と自分の顔を撫でている。

女1 (ガックリ) わかりやすいヤツ……。

亮子 当たった？

女1 あなたね、男でしょ！ もう立派な社会人だ！ 少しはシャンとしなさいよね。

熊野 ……はあ……。でも、どうしたらいいか……。

女1 だアからさっさとウチ帰れって言ってるでしょさっきから！

そこへ男2、元気よく登場。

男2 おはよつす！ あれ、悦ちゃん、なんでそんなとこに座ってんの。

亮子 うるさいのが来た。

女1 (悦子) どこに座ってようとあたしの勝手。

男2 社長！ どうしたんすか社長！ 顔色、いと悪<sup>あ</sup>し！

悦子 飲み過ぎに決まってるでしょ。

亮子 生理だって言ってるでしょ！ もう話しかけないで。

亮子、珈琲片手に、ノート型のコンピュータの前に座り、もの凄い勢いでキーボ  
ードを叩きはじめる。

男2 機嫌、悪し…。

悦子 ねえ、あんた仕事すんの？

男2 するよ、そりゃ。

悦子 ウチお客さんきてんのよ。

男2 そんなこと言ったってコッチだって仕事なんだから。

悦子 だってさ…

男2 ホラ、予定表にだってちゃんと書いてあんだろ、十日十五時より小川・作業って。

悦子 そんなのどこに書いてあんのよ。ていうか予定表ってどこよ。

男2 (小川) ん？ どうかそのへんだよ。

小川、そう言いつつ、さっさと作業台のような机に向かい、木材や工作機械を並べ始めている。

悦子 (慌てて) あ、ねえ、ちょっと、作業ってどんな作業よ。

小川 今日はだな、側面板と裏板の削り出し。これが特注モンでさあ。側面はスプルーヌの二層張り合わせ、突板はメイプル。十九世紀スタイルのラコートとギブソンを足して二で割ったようなそれはそれはマニアックな…

悦子 わかんないこと言ってるんじゃないわよ。ノコギリ使うの？

小川 使いますねえ。

悦子 …(絶望的なため息)

熊野 …あのう。

悦子 なに。

熊野 ここは、あの、悩み事相談の…

悦子 ああ、いいのいいの、気にしないで。ホラ、その看板見えるでしょ。

熊野 はあ。

悦子 「よろず相談事解決社 マイティ・ワン」これがウチね。

熊野 はい。

悦子 でその隣…

熊野 「有限会社…ユエ」。

小川 コンピュータから目を離さずに、亮子が拳手する。

悦子 所謂ベンチャー企業ってやつ。ほら、あれよ、今流行りのアレ、モーホーだっけ？ なんだっけ？ あ、ヨーコーか。

亮子 あたしや具志堅か。

小川 SOHOって言いたい？

悦子 それよ。ソーホー。日本語に訳すと、零細企業。

亮子 ほっといて。

悦子 今なにやってんだっけ？

亮子 …。(仕事に集中していて答ええない)

小川 人生ゲームだよ。

熊野 人生ゲーム？

悦子 あ、そうだそうだ。あのね、六十五歳からスタートする、老後に特化した人生ゲーム作ってんだって。売れると思う？

熊野 …さあ…。

悦子 まあ、なにが当たるかわかんないからねえ。そんでその隣の…

熊野 「小川楽器工房」…。

小川 私です。

熊野 あ、どうも…

小川 得意分野は主に弦楽器、リュート、マンドリン、ギター等の製作請負、完全手作り、オリジナル・ミュージック・インストウルメンタル、フォー・ユー。年中無休見積もり無料。

悦子 …だって。

亮子 年中無休って、あんたそのギターの注文来るまで半年間開店休業だったじゃないよ。

小川 うん、そう。

熊野 はあ…。(なんか感心しているらしい)手作りの楽器、ですか。

小川 どう？ お兄さんもひとつ。この世にふたつとないあなただけの超オリジナル・インストウルメンタル…

亮子 同じのふたつ作れないのよねえ。

小川 うん、そう。

熊野 いやあ、私は…楽器は…あの、あんまり…

悦子 (遮って)そついうわけで、ここは三つの会社でシェアしてんの。予定表にそれぞれ使用予定時間を書き込んで…その予定表に基づいて、お互い重要な仕事がち合わないようになく調整しつつ、予定、表、を…ああッ(予定表を探しているが、諦める)今日はカブってるわけ！ モロに！ ちよっと気が散るかもしれないけど我慢して。

熊野 はい、わかりました。

悦子 で、と。じゃあ、とにかくもう一回問題を整理しましょう。あなた、熊野さん、熊野周平さん。(机の上の書類等を引っかき回してメモを掘り出し、それを見ながら)三十五歳。昭和四十一年生まれ。奥さんは熊野…

熊野 静枝…です。

悦子 熊野静枝さん。昭和四十三年生まれ。三十三歳。

熊野 はい。

亮子 (仕事しながら)あら、あたしと同じ。

小川 (仕事しながら)え？

亮子 えってなによ？ どういう意味の「え」？

小川 いやあ、そのお…

悦子 外野うるさい！…で、子供なし。奥さんの親御さんと同居。この春で結婚四年目、と。

熊野 はい。

悦子 で、結婚当初から現在に至るまで四年の間、性生活はまったくなし、と。

熊野 はい。

小川・亮子 えッ！

悦子 だからうるさいって言ってんでしょッ！ 仕事してなさいよ！

小川・亮子 …。(作業再開)

悦子 …で、えー、その問題について奥さんの静枝さんは…

小川、亮子の作業の手が止まっている。

悦子 聞き耳立ててんじゃないわよ！

小川、亮子、手が動き出す。

悦子 ……その問題に対して、奥さんはなにも言わないわけですか？

熊野 ええ。

悦子 あなたも、なにも言わないわけですか？

熊野 はあ。

小川・亮子 なんで（小川）だよ！

悦子 ……。

小川・亮子 ……。

悦子 あのねえ。…邪魔しないでよ、もうッ！ どうせ興味半分の野次馬なんだから。こっちは真剣に相談してんのよ。わかったッ？…仕事してなさい、仕事を！

小川、亮子、熱心に仕事に打ち込む、フリ。

悦子 ……で、どうしてよ？

熊野 は。

悦子 なんてなんにも言わないわけ？ だっておかしいじゃない？ そりゃあまあ、結婚したからって言って、人はイロイロだからね、別にセックスレスでもいいんだけどさ。あなたの場合、話し合いの結果そうしてるってわけでもないんですよ？話し合い……したことないですね……。

悦子 でしょ。自然にそうなるわけでしょ？

熊野 まあ、自然と言えれば自然に……。

悦子 わかんないわねえ……。

悦子の目の前の電話が鳴る。

悦子、ちよっと驚いて身を引き、熊野に身振りして断って受話器を取る。

悦子 はいもしもし。…はいそうです。…はい。…加藤さん？

亮子 ああ、アタシだ。

悦子 はい、少々お待ちを。…中山社長。お電話。

悦子から子機を受け取り、立ったまま話し出す亮子。

亮子 ……はい無限の未来を追求する有限会社工場でございます。はいはい。ああ民ちゃん。うん。やってるわよ。…サボってないって！ ええ？ うん、うん……

悦子 えー、それで、なんだっけか……。

熊野 自然にそうなっているという……

悦子 ああ、そうだそうだ。

亮子 なに言ってるのよ！ そんなの無理よ。無理無理よ。…だからこないだ渡したアレはプロトタイプなんだってば！

悦子 あの、そのところをもう一度説明してもらえますかね。

熊野 はあ…それが、自分でもよくわからないんですよ……。

亮子 ええ？ そんなの知ったこっちゃないわよ！ だって老後なんだから！ もっと明るい選択肢だったって…じゃあ他になにがあんの？

悦子 あなたがわかんなかったらアタシにわかるわけないでしょ。あのですね、少しはこっちの身になって話を整理してもらって、それから相談に来てもらわないと。ですよね…。

亮子 だいたいね、六十五歳の定年がゲームのスタートなわけでしょ？ その後なにがあんのよ。老後が波瀾万丈だったら疲れちゃうじゃないの。え？ なに？ 例えはなに？…突然遺産を相続する？ そんなリアリティのない…え？ なに？ やっぱりこんなことに相談するよつなことじゃないですよ。

悦子 じゃあなんでここに来たわけ？

ギューーン、とけたたましい音を立てて、小川楽器工房の電動ノコギリが唸る。

熊野 え？

悦子 なんで、ここに、来たわけ？

亮子 いや、だから夢を盛り込めって言われてもね…！ 限界ってもんが、ええ？

熊野 それはその…久喜さんに言われて…

ギューーン。

悦子 え？ え？

熊野 久喜さんに言われて、ですね…

亮子 いくらゲームだってそんなのおかしいでしょうが。え？ 一念発起して宇宙飛行士を目指す？ 不可能でしょ！

ギューギュー、ギューーン…

悦子 ちよつと静かにしてッ…！

小川・亮子 …。

小川 仕事しるって言ったりすんなって言ったり…

悦子 …！ (指を振りかざして小川を威嚇する)

亮子 …(ぼそぼそと)とにかくね…、だいたい企画が企画なんだからどうしたって地味になっちゃうのよ…うん…うん…

悦子 誰だって？

熊野 実は、以前あるところで、久喜玲二さんという人と知り合いました。そのとき一度訪ねて来いと言われて、それで…

悦子 久喜さんって…あなた所長の知り合いなの？

熊野 ええ、まあ…

悦子 あの人どこにいるの？

熊野 さあ…。

悦子 さあ、じゃないわよ。ハッキリしてよ。あの男が突然行方くらますもんだからアタシがこんな目に…

入り口から男の音がする。

男3 (声) っめんどさい。

悦子、亮子、小川ピタリと動きを止める。  
顔を見合わせる三人。

男3 (声) 「ごめんくださあい！」

亮子 ……ミズタニ？

悦子 ……しいッ (頷く)

亮子 …… (電話口に小声で)「ちょっと、ちょっと待って民ちゃん。かけ直すから…」 (電話切る)

男3 (声) 「ごめんくださあい！ 水谷ですがあ！」

悦子 …… (熊野に「静かに」の合図)

熊野 …… (ワケがわからないままに黙る)

悦子、亮子、息を殺している。

小川、窓のカーテンをそつと閉めたりしている。

男3 (水谷) 「どなたかいらっしゃいませんかあ？」

と声をあげつつ、男が小屋の外側を回ってくる。  
スーツ姿、ネクタイをきちんと締め、しかし足にはスニーカーを履いている若い男である。

水谷 久喜さん！ いらつしやいませんか、久喜さあん！ 水谷です！ お留守ですか

あ？ 居留守ですか？

小屋のなかでは小川達三人が息を殺している。

突如、三人の心理状態的には落雷の如き大音声で、電話が鳴る。

かすかな電話の音を聞きつけて、去りかけていた水谷は再び戻ってくる。  
静かなパニックの拳げ句、小川が電話をとる。

悦子 (小川に)「バカ！ 鳴らしとけばよかったのに！」

小川 だってさ！

悦子、小川から受話器を取り上げて、耳に当てる。

悦子 亮子さん！ 亮子さん！

悦子、受話器を亮子に渡す。

亮子 ……ハイ……。かけ直すって言うてるじゃないの！ 今、取り込み中…え？ え？

女3登場、携帯を耳に当てている。  
いわゆるデキルOL風の格好だ。

女3 (小屋の外)「だからあ、すぐそばまで来てるんだってば。」

亮子 (小屋の中)「すぐそばって、え？ ここの？」

女3 (民子)「そうよう。とにかく直接打ち合わせしましょうよ。あ、これね。…こんな野原がまだあったのねえ。へえー…。」

亮子 ちよつと待って、加藤さん、あなたなんでこのこと知ってるの？

民子 なに言ってるの、貴女、昨夜説明してくれたじゃない。覚えてない？

亮子 ……。

民子 ついたわよ、どっから入ればいいの？…もしもし？

亮子 ……じゃあ、あなた今、そこにいるわけね？

悦子・小川 ……。

亮子に向かつて盛んにNGサインを送る小川と悦子。  
一方民子は建物をぐるりと回って来た水谷と鉢合わせする。

民子  
…。  
水谷  
…。

なんとなく目礼し合つふたり。  
水谷、手振りで「ヒョットシテ、ソノ電話デ、コノ中ノ人ト話シテラッシュヤイマス？」  
民子、身振りで肯定する。

民子 (やや声をひそめて) なんか男の方が外でお待ちになってるわよ…。  
亮子 ……。あのね、加藤サン、私はそこにいないのね。ていうかここには誰もいない

わけ。

民子 はあ？ ニジって、ニジのこと？

亮子 そう、ここ。イヤ、そこ。えーと、その、あなたのいる、野原に建ってる建物。

民子 だからここでしょ？

亮子 そう、そこ。

民子 だってこの電話、この電話なんでしょ？ そう言わなかった？

亮子 言った、確かに言った…。

水谷 (声・ドア側に回っている) えー、水谷でございませう。ワタクシと顔を合わせたくないというお気持ちはわかりますが、逃げ隠れしていても話は前へ進みませう。さあ、潔くここを開けましょう。

民子 …ひよつとして、マズいところに来ちゃったかしら？

亮子 (亮子、カーテンを開け、窓も開けつつ) うん、もついい。

民子 (顔が合つ) あら。

亮子 遅かったから。

悦子がドアの鍵を開ける。水谷がドアから入ってくる。

水谷 ああ、どうも。皆さんお揃いで。水谷です。

悦子 どうも。

民子 出直そうか？

亮子 いいわよ、せっかく来たんだから。入ってらっしゃいよ。

民子 オッケー。

民子、ドア側に回っていく。

水谷 日月<sup>たてもり</sup>さんでしたね。日月悦子さん。日に月と書いてタテモリ。珍しいお名前なんです。私すぐ覚ええました。

悦子 …。

水谷 そちら小川高広さん。いかがですか、新しい楽器のほうは。はかどってらっしゃいますか。

小川 いやあ、まあ…おかげさまで。

水谷 それから中山亮子さん。

中山 どうも。

民子 失礼します…。(ドアからソロリと入ってくる)

水谷 ああ、失礼。(民子に道を開ける)

民子 あら、どうも。  
水谷 いやいや、どうぞ。水谷です。  
民子 あ、加藤です。  
亮子 民ちゃん、いいから。

民子、亮子のほうへ。

水谷 どうやら肝心の久喜玲二さんがいらっしやらないようですね…

悦子 見ての通り所長はいません。どこにいるかもわかりません。うちは今、来客中で  
すし、日を改めていただだけませんか。

水谷 来客…。

水谷、熊野を見る。

熊野 …。

水谷 水谷です。

熊野 熊野です。

悦子 いいから。

水谷 …お仕事というと、例の「トラブル解決」ですか。

悦子 (水谷の笑顔を見てカチンとくる) なにか？

水谷 いや…、餅は餅屋とかいうことわざがありましたねえ。まあ、実になんという  
か…(笑い出す)

悦子 なにが言いたいんですか。

水谷 いや失礼。(熊野に) まあトラブルと言えばこちらの方々はたいへんなトラブル  
の渦中にいらっしやるわけなんですよ。

熊野 はあ…そうなんですか。

悦子 余計なお世話でしょ！ この建物は所長が…久喜玲二が使用权を…たい…たい…

小川 太極拳。

悦子 太極…太極拳？

亮子 貸与。

悦子 貸与されてるはずですよ。その書類もお見せしたはずですよ。それ以上のことは久喜  
と直接話してくださいと何度も言ってるんですよ。

水谷 残念ですがあの書類は無効ですよ。

小川 無効ってどういうこと？

水谷 より厳密に申し上げれば、あれは偽造ですよ。あの書類をしかるべき部署に提出す  
れば、公文書偽造罪を構成する事件が立件します。…ですから、まあ久喜さんが  
こちらにいらっしやる筈はないと思っはいたんですが…。ですから、ねえ、熊  
田さん。

熊野 熊野です。

水谷 熊野さん。あなたの悩みを解決する前に、まず目先の大問題を解決するほうが先

決だと思えますよ。

熊野 はあ…。あの、目先のこと…

水谷 例えば…、明日から皆さんがどこで仕事をするか、というふうなことですな。

一瞬、部屋に沈黙が落ちる。

小川 ……明日から？……って…  
悦子 それどついつことよ！

水谷 皆さんには何度かご説明申し上げてきた通り、この建物は公有地を不法占有しています。再三の退去勧告にも応じられず、強制執行もやむなしと判断いたします。

小川 強制執行？  
亮子 ちよつと待ちなさいよ！

水谷、持参のバッグの中から、工事用の黄色いヘルメットを取り出す。  
出来事の手感をほらんだロック調のBGMが流れはじめる。

水谷 この際、久喜さんがいらつしやらなくとも状況は変わりませんが……残念ながら時間がありません。

悦子 だいたいあなたなんの権限があつて…

水谷 権限？ 私の権限ではない。これは法律に定められた国家の権限です。個人的には皆さんのお気持ちはよくわかりますが……加藤さん？

民子 は？ はい。

水谷 あなたも私と同じく、公おおやけに仕える人間。この気持ち、おわかりいただけでしょうか。

民子 ……あの、私のことをご存じですか？

工事用の重機が四方から迫ってくる音がする。

エンジンやキャタピラーの軋きしりが通底音となって小屋を振わせる。

水谷 加藤民子さん。市役所の福祉課に所属していらつしやる。公民館におけるお年寄り向けのリクリエーション作りで、創意工夫に富んだいいお仕事をしておられる。惜しむらくは…

サイレン。エンジン音。工事現場に溢れているさまざまな音が、近づいてきている。

水谷 貧弱な予算と理解のない上司、というところですか。

民子 ……そういうあなたは、どなた？

水谷 (ヘルメットの紐をキリリと締め) 水谷です。水谷育馬です。

民子 ……。

工事用車両の音がマックスに達し、止む。

水谷 (腕時計を見ながら)……壁際にいらつしやるのは危ないですよ。

悦子 ちよつと待って。なにすんの。どつするつもりなの？

水谷 ……時間です。

大音響とともに、小屋の壁が一枚一枚、外側から引き剥がされるように倒れていく。  
水谷を除く小屋の人々は驚愕し、徐々に小屋の中央に。

小川 冗談だろ……おい！

悦子 ちよつと！ なによ！ べついついことよおー！

鋼鉄製のワイヤーにテンションがかかる。  
軽油を燃やしながらエンジンが唸る。  
電気系統がショートを繰り返す。  
ロックヒートがすべてを肯定する。  
舞台は暗くなっていく。

亮子 あたしのマシン…

亮子がコンピュータに飛びつく。

民子 中山さん！

悦子 亮子さん！

小川と民子の手を借りて、壁際のコンピュータを救い出し、中央のテーブルに載せる。

数人の、黒い上下の男女がどこからともなくあらわれ、小屋の残骸をテキパキと片づけていく。

騒ぎを後目に水谷は小屋からまっすぐ前へ歩みでてくる。  
その後ろ姿へ

悦子 こんな…こんなことしていいと思ってるの！ ただじゃすまないわよ！

ロックが終わる。

水谷に明かり。

水谷、優雅にハンカチで口元を押さえながら、優雅に携帯電話を取り出す。

水谷 …水谷です。やあどうも。こちら無事終わりました。ええ恙なく。いやいや。面倒なことはなにひとつ。ええ。はい。それでは。水谷でした。

水谷の背後では、真っ黒な上下を着た男女がテキパキと残骸を片づけていく。

水谷、電話をしまい、退場していく。

暗い中、亮子のパソコンのモニタが、ショートするような感じで、次々に文字を点滅させていく。

「こ」「の」「せ」「ま」「い」「野」「原」「い」「っ」「ぱ」「い」

黒装束のひとりが、モニタの接続ケーブルに手を絡め、力任せに引き抜くと、明滅する文字を映す画面がブツリと消え、舞台は――

暗転する。

## ACT 2 野原の履歴

冒険っぽい音楽が流れる。

廃墟と化した野原に、オトナ子供の人影が染み出す。  
オトナ子供とは子供のような格好をしているが大人であるようなものである。

オトナ子供 A (レイジ＝久喜玲(二))  
オトナ子供 B (マサオ＝芝昌男)  
オトナ子供 C (ココキ＝美作小雪)  
オトナ子供 D (ノブオ＝松下信夫)。

レイジ ぜんた——い。とまれ。番号。1。

マサオ 2。

ココキ 3。

ノブオ …。

みんながノブオを注目。

レイジ ノブオ！

ノブオ、指で4を出す。

レイジ よーし。全員いるな。これからこの野原を探検するぞ。準備はいいか。

マサオ・ココキ おうッ。

マサオとココキ、用意した冒険グッズを振りかざす。  
あんまり役には立ちそうもないものだが、レイジは満足げに頷く。

ノブオ …。

全員がノブオを注目する。

ノブオ、意を決して、用意したものを振り上げる。

全員 …。

そのあまりの役に立たなさぶりに絶句する。

レイジ よ、よーし。とにかく探検だ。まず隊列を組むぞ。よしマサオ！先頭に立て！  
マサオ えっ、おれ？

レイジ そう。おまえ。前方に危険があったらすぐに知らせるんだ。それが先頭の役  
目だ。

マサオ おう！

レイジ そして二番手にココキだ。

ココキ えッ！

レイジ いちいち驚くな。二番手だ。

ココキ 二番手はなにを…？

レイジ 二番手…二番手は唄だ。

ココキ 唄。

レイジ そう唄。隊員を勇気づけ、どんな敵にも立ち向かっていけるような、そういう唄を唄い続けるんだ。いいか、わかったか！

ココキ アイアイサー！  
レイジ で、三番手がおれ。最後がノブ…ノブオ！ どこ行った！ よそ見すんな！  
ノブオ …。

ココキ やっぱりさあ、ノブオくんには無理なんじゃないのお？  
マサオ だってトクシユガツキユウだもんなあ。

レイジ バカモン！ 貴様らそれでも少年冒険隊の隊員か！ そういうサベツはオトナ  
になつてからしろ！ いやちがう！ サベツはしちやいけななんだぞ。おっ父も  
おっ母も言つてたぞ。

ココキ うちのママはトクシユガツキユウの子とは遊ばないようにしなさいって言つて  
たもん。

レイジ だから…いいんだよ、そーゆー見の狭いオトナの言つことは聞かなくていい  
の。だいたいノブオは特殊学級じゃないぞ、今年からレッキとしたおれたちのク  
ラスメートだ。なあノブオ。

ノブオ (ガツポーズ)

レイジ ほおらガツポーズだ。いいかノブオ、おまえのポジションが一番後ろだ。背  
後に注意を払う後方警戒担当だ。地味だし、目立たない。だが決して孤独だなん  
て思つてはいけない。誰もお前の存在を目で見ることがないけれど、でもおれ達  
は知っている。振り返ればおまえがいることを背中を知っている。

ココキ 振り返つてもいなくなつたらどうするの？

マサオ すぐどつかいつちゃうからなあ。

レイジ だいじょうぶだ！ ノブオはそんな奴じゃ…ノブオ！ よそ見すんなつてい  
うの！

ノブオ …！

レイジ いいか、背後でなにか異常があつたらすぐに知らせるんだぞ。

マサオ だってノブオしゃべれないじゃん。

レイジ またそういうサベツ的言辞を吐く。ノブオはしゃべれないんじゃないぞ。すげ  
え無口なだけだ。なつ。

ノブオ …。

マサオ 無口な後方警戒担当つて、ちよつとやだよなあ。

ココキ 不安よね。

レイジ いいんだよ。ちゃんと策はある。いいかノブオ、なにかあつたらおれの背中を  
つつつくんだぞ。あ痛。

ノブオ、自分の持つてきた冒険グッズでレイジをつつく。

レイジ それはやめろ。指でいいんだよ、指で。そうそう。そうだ。ん？

ノブオ、レイジの背中に字を書いているらしい。

マサオ なんか書いてるよ。

レイジ なに？ なんだよ…。も？

ココキ も？

ノブオ、二文字目を書く。

レイジ …ち。

ココキ ち。

マサオ もち。

ココキ もち？

ノブオ ……(なんだか堂々としている)

レイジ ……もちってなんだ、もちって。なんかの暗号か。

ノブオ ……。

レイジ 食いたいのか…。

ノブオ (頷く)

レイジ 後にしる後に。餅は正月。いいか。これからかねてより計画していた、空き地探検に入る。探検の目的については、機密漏洩防止のため、諸君にはまだ明かしていなかったと思うが、ここでその目的を…

マサオ 秘密基地作るんじゃないの？

ココキ だよねだよね。

レイジ ……なんで知ってる。

マサオ レージくん、クラスの人にも言ってたじゃんか。

ココキ 違うのー？ あたしママにそう言ってきたのに。

レイジ 言つなよ、秘密基地なんだから。…あのなつ、おまえら…も、ち。

ノブオがいつの間にか背後に回って、背中に指文字を書いている。

レイジ やめろ！ モチはもついい！…よしわかった！ 目的意識が明確になったところで出発だ。この先思いがけない困難やさまざまな敵が目の前に立ちふさがるだろう！ どんな危機に陥っても、力を合わせて乗り切るんだ。すなわち、ピンチをチャンスに変える、それがおれたち少年冒険隊のモットーだ。わかったな。

マサオ・ココキ おうっ。

ノブオ ……。

レイジ ……わかったのか。

ノブオ ……。

レイジ だから…ピンチをチャンスに変えるんだよ。

ノブオ (身振り)

レイジ パンツをタンスにしまってどうする。

ノブオ (身振り)

レイジ サンタにパンチを見舞ってどうする。もついい！ 出発だ。整列！ マサオ！

マサオ 前方障害物なし。

レイジ 出発！…ココキ、唄！

一列になつてすすむオトナ子供たち。

ココキ、やたら低い声で、流行歌を唄い始める。

レイジ ストップ！…なんだよそれは！

ココキ いやあ…。冒険ほくしようと思つて…。

レイジ 怖くなっちゃうじゃないか！ そんなじゃないんだよ。もっとなんか、勇気の出るような、希望のわくわくするような…そうこつ…

おんぞ。ノブオが、ひょっこりひょつたん島のテーマ曲を、唸り声で唄いはじ

三人…。

他の三人、ノブオの唸り声に合わせて、一緒に唄いながら進んでいく。  
廃墟の探索行動が続く。  
ノブオ、ポケットから餅を出して食っている。

マサオ 全体、止まれ！

ココキ (レイジに) 止まれ！

レイジ (ノブオに) 止まれ！…餅を食つな！

マサオ ここに地下室があります。

レイジ なにっ。

レイジが床の一部を持ち上げると、ほっかり穴があく。

レイジ 地下室だ…。

マサオ すげえ。

ココキ (緊張のあまり低い声で唄いだす) じゅんせい、らくくありゃ…

レイジ 唄うな！

マサオ どうするどうする？

レイジ 懐中電灯は？

マサオ ある。

レイジ …入るか。

ココキ やめようやめようよ！

レイジ 落ち着け、だいじょうぶだ。ノブオ…餅を食うなというのに。

ノブオ …。

レイジ よく聞け。俺たちはこれからこの中を探検する。おまえは見張りだ。この入口が塞がれたりしないように、監視するんだ。いいな。

ノブオ、うなづく。

ココキ ほんとに入るの？ ねえ、入るの？

レイジ …いくぞ。

マサオ、懐中電灯をつけて、穴に入っていく。  
続いてココキ。

レイジ じゃあな、ノブオ、頼んだぞ。

オトナ子供たちが次々に地面の穴に消えていく。  
蓋が閉まる。

ノブオ …。

気がつくとなブオ＝松下ひとりがぼつと立っている。  
山口佐和子、登場 松下に近づく。

佐和子 松下さん。

松下 ん…ああ。

佐和子 どうしたんです、ぼつと立って。

松下 うん…いや。なんでもない。

佐和子 みんな待ってますよ。

松下 …なあ、山口。

佐和子 はい。

松下 ひよっこりひようつたん島って知ってる？

佐和子 は？

松下 ひよっこりひようつたん島。

佐和子 ええ、まあ、うつすらとは。

松下 唄える？

佐和子 いやあ、どうでしょう、唄までは…。

松下 だよな。

佐和子 どうしたんです？

松下 いや…、ちよつとな。昔のこと思い出してた。

佐和子 生まれ故郷ですもんね。

松下 …ああ。長いこと帰ってなかったけどな。

佐和子 ずいぶん変わりました？

松下 どうかな…少なくともこの空き地は変わってない。変わってないっていうか…戻った。

佐和子 戻ったって？

松下 うんとガキのころは、こんなだった。その後、一度帰ってきたことがある。その時はここに小さな小屋が建ってた。

佐和子 例の強制撤去された小屋ですか。松下さん、この町に帰ってきたことあるんですか。

松下 …(頷く)

佐和子 知らなかった。

松下 ああ、お前と知り合う前だからな。

佐和子 …。

なんとなく思いに沈んでいる松下に、つられて口をつくむ佐和子。

松下 …なあ、山口。

佐和子 はい？

松下 …うまくいくかな？

佐和子 …不安ですか？

松下 うん。

佐和子 だいじょうぶですよ。成功します。必ず。

松下、思いを振り切るように、山口に頷いて見せる。  
松下、山口、退場。

中山亮子、登場。

反対側から、加藤民子、登場。

亮子 民ちゃん。

民子 ああ、ごめんなさい。待たせちゃった？

亮子 今来たところよ。ずいぶん久しぶりね。

民子 ええ、ホントに…。

亮子 …。

民子 あの…ね。亮子さん。

亮子 ん？

民子 …ホント、ごめんなさい。（頭を下げる）

亮子 なによつ、いきなり。

民子 仕事、あれつきりになっちゃって…。亮子さんにあそこまでやってもらったのに…。

亮子 ああ、人生ゲーム？ いいのよいいのよ。いまさら頭下げないですよ。だってあな  
た配置替えになっちゃったんだし。しょうがないじゃないの。

民子 言い訳になっちゃうけど、埋め合わせする暇もないほど忙しくなっちゃって…

亮子 介護保険課だったっけ？ たいへんなの？

民子 てんてこまいしてるわ。先月から六十五歳以上のから徴収が始まったんだけ  
ど…かなり未納があるのよ。

亮子 保険料？

民子 そうなの。督促状出したり、チラシ作って配ったり、電話で説明したり…たいへ  
んよ。

亮子 払わない人けっこういるんだ。

民子 お年寄りが多いしね…。一人暮らしの人だと窓口まで来るのもたいへんだし、な  
かには「元気なのになんで払わなきゃならないのか」って怒り出す人もいるし。

亮子 へえ…。

民子 そうかと思えば「わしゃあよくできた孫がおるから国の世話にはならん。だから  
払わん」とかね。

亮子 それって保険のなんたるかが分かってないんじゃない。

民子 まあ健康保険と違って、ほとんどの人にとって掛け捨てになるわけだから、発想  
的には無理もないと思うんだけど…とにかくたいへんなわけよ。

亮子 なるほど…。苦情処理とかが面倒そうね。

民子 そうなのよ。九割近くは保険料がらみ。いちばん多いのは「介護保険なんぞに  
入った覚えがないのになんで勝手に年金から差し引くのか」っていつやつ。

亮子 ああ。

民子 年金が頼りの人にとっては死活問題だから…。答えるほうも辛いワケ。

亮子 そりゃそうよね。

民子 …あら、ゴメンなさい。なんかあたしの愚痴ばかり…。

亮子 いいわよ。…で、例の件なんだけど。

民子 ええ、調べてきたわ。

亮子 どうだった？ やっぱりこの土地って…

民子 うん。間違いありません。ここは法的にも正式に市の土地よ。

亮子 そつ。

民子 ここ十六号市有地っていうんだけど、もう十年くらい前から、所有者は市になっ  
てるみたい。だからあの強制執行は…

亮子 合法的ってわけだ。

民子 ええ。やりかたはちよつと荒っぽかったけどね。

亮子 まあそんなところでしょうね…。でも民ちゃん、あたしが知りたいのはね、合法的かどうかってことよりも、どつしてあんなに急に強制退去させられたのかってことなのよ。

民子 うん…。それがちょっと…。

亮子 なによ？

民子 よくわからないんだけど…どつやらどこかに売却する計画があるみたい。

亮子 どこかってどこ？

民子 それがねえ、なんか聞いてもよくわからないのよ。ちょっと不思議なんだけど…。

亮子 不思議ってなにが？

民子 なんか…この空き地のことになると、なんていうか…煙草っていうか…壁がある

みたいな感じで…

亮子 壁？

民子 確かになにかあるみたいだけど、話がうまく伝わってこないのよ。

亮子 …。

民子 とにかく分かるのは、売却の予定があるらしいってことだけ。そうすると、決めるのは市議会だから、私たち役所のほうには…

亮子 情報がない？

民子 うーん。でも普通は伝わってくるはずなんだなあ…。

亮子 …。

民子 まあ私なんかはさ、変なところに売り払うくらいなら、特養のひとつでも作ってくればいいのって思いますよ。

亮子 特養？

民子 特別養護老人ホーム。

亮子 ああ。

民子 施設、足りないんですよ、ホントに。認定受けた人は施設希望の人が多いんだけど。

亮子 そうなんだ。

民子 ケアマネの話聞くとね、プラン作る時、サービスの空きがなくて困るのが、施設がらみのサービスなんですよ。訪問介護は足りてるんだけど。結局施設を作る土地とお金がないんですよ…ああ、また愚痴になっちゃいましたね。

亮子 土地と金…か。

民子 ええ。

亮子 ありがと、民ちゃん。忙しいのにわざわざ調べてくれて。

民子 お役に立てませんでしたね。

亮子 そうでもないわよ。…食事でもする？

民子 あ、いいえ、これからまた仕事なんです。

亮子 そう。じゃあ、また。

民子 それじゃ。

民子、退場していく。

亮子、一人残って野原を見渡す。

亮子 …十六号市有地…か。

暗転。

## ACT3 野原の未来

美作小雪が仕事場で電話をかけている。

小雪 ……もしもしもしもし！…ああどうも。「こちらタウン情報誌」ひよっこり」の美作です。どうもどうもどうも。あ、掛畑さん！ 小雪です。どうも先日はどうも。あのですねあのですね、どうですか最近。なんかネタないですか。え、そんなに毎月はない？ またまたまた。そんな、いじめないでくださいよ。弱小タウン誌なんですから。なんか…え？ モチ？ モチを配るんですか？ 警察が？ え、え、え？ 交通安全モチ？…運転は気を長くモチましょう…？ あああなるほど…バカにしてんのか…。あ、いやいやいや、なんでもなんでも。なるほどー。モチですかあ。ええ、ええ、ええ。それは、ぜひ、取材させてください。ええ。お願いしますあ。それじゃどうもどうも！ (電話切る)…。(かける)もしもし！ あ、こちらタウン情報誌「ひよっこり」…あ、あ、あ、その声は大沢さん！ 小雪です。どうもどうもどうも。こないだはどうも。なんかネタない？ え？ え？ え？ ……この売り尽くしセール？ それ先週書きました。他は他は？ え？ ……この従業員就職探しの旅？……うん…他は？ いやいやいや、そこ以外で。だいたいそこじゃないですが、この町には。タウン誌なんですからなんか地域に密着した…え？ 十六号？ なにそれ？…ああ、空き地なんですわ？ グループホーム？ ができるんですか？ グループホームって、あの、お年寄り同士で暮らすっていう？ え？ ああ、できるんじゃないって、作るっていう…運動なんだ。市民運動ネタか…。うん。いいかも…で、その十六号市有地っていうのはどこに…ええ…あ、ごめん大沢さん。客だ。その話、また聞かせて。うん。どもどもども。それじゃ。

小雪、電話切る。

戸口に、山口佐和子が立っている。

佐和子 こんにちは。

小雪 どうも、あの、えーと…お約束してましたっけ？

佐和子 いいえ。

小雪 ……あ、そう。ええと私編集長の美作ですが…

佐和子 私、山口佐和子といいます。

小雪 どうも。で、どんなご用件でしょう。

佐和子 超小型の廃棄物処理システムってご存じですか？

小雪 は？

佐和子 最近あちこちにできているんですよ。

小雪 はあ。ああ、ええ、知ってますよ。確か、普通に処理するとすごく手間のかかるような廃棄物を、有毒ガスを発生せずに処理できるっていう…

佐和子 そういつふれこみですね。

小雪 でも、確か安全性にまだ問題があるんじゃないかな…。

佐和子 一応、認可はされたんです。でも導入には消極的なところが多いですね。焼却炉そのものは外国の会社で作って…

小雪 ああ、思い出した。最初、どっか外国で事故があって…毒物が洩れたとか…

佐和子　そうです。それで導入に踏み切れないところが多いんですね。

小雪　でも将来性はあるんじゃない？ ゴミ処理問題を革命的に解決するって騒がれたわよね、一時期。

佐和子　確かに、大きな処理場を作る費用や、ゴミを運ぶ手間を考えると、出したゴミをよそへ運ばずにその町で処理できる。そういう点では将来性はあると思います。

小雪　…。

佐和子　でもそれはじゅうぶん安全性が確認されてからの話じゃないでしょうか？

小雪　正論だけど…

佐和子　記事にしていただけませんか？

小雪　なんの記事？ その焼却炉について？

佐和子　その焼却炉がこの町にやってくるっていうことについて。

小雪　…。

佐和子　記事になりませんか？

小雪　ちよっと待って。あなたの言ってるのは…

佐和子　市議会はこの町に新型の廃棄物処理システムを、試験的に導入するための準備を進めています。

小雪　…。

佐和子　確かな筋の情報ですよ。裏付けもあります。

小雪　… 山口さん、あなたは… どういう人？

佐和子　わたし、一市民です。それじゃいけませんか？ ニュースソースが匿名じゃないけませんか？

小雪　裏付けの取れ方次第だけど…。

佐和子　（封筒を渡す）この中に全部入ってます。判断はお任せしますから。

小雪　…。

佐和子　それじゃ。突然お邪魔してすみませんでした。

小雪　…。

去ろうとする佐和子。

小雪　… ねえ、その処理場って…

佐和子　十六号市有地ってご存じですか？

小雪　…。

佐和子　そこにできる予定になっています。

佐和子、退場

小雪、退場。

野原。

芝田男、登場

芝　…。（あたりを見回している）

芝、地下室の入口あたりに来てしゃがみこむ。  
そこに、水谷が登場。

水谷　芝さん。

芝 …。  
水谷 下見ですか？

芝 いや、まさか。ちょっと寄ってみただけです。

水谷 芝さんは、この町の生まれだそう。懐かしいでしょう。

芝 …。

水谷 このあたりは変わりましたか？

芝 ここは…空き地でしたよ。昔から。

水谷 そうですか。しかしそれももうすぐ変わる。

芝 …ええ。

水谷 それにしても…（あたりを見回してから）たいした技術ですねえ。こんな、猫の額のような土地に、完全な廃棄物処理プラントを設置できる。これ、もちろん技術特許ですよな？

芝 申請中です。何かライバルがいますのでね。

水谷 なるほど。しかしまあ、仮に特許で遅れをとったところで、特許ごと相手を丸呑みにできるじゃありませんか。なにしろ世界に冠たるミドラーグループだ。

芝 水谷さん、それはまだ…

水谷 そうですな。まだ社名を出す段階ではない。

芝 慎重に進めていただきたいと思いますな。

水谷 ええ、もちろん。

芝 仕掛けの具合はどうです？

水谷 もうじき表に出ます。この土地になにが作られようとしているのかを、この町の人びとは知ることになる。

芝 反応は？

水谷 予想ではそれほど強くないはず。システム自体は認可を受けているし、なんといつてもこういつ分散型の廃棄物処理は時流に乗っています。自分達の出たゴミは自分達で始末しよう、ということですね。

稍沈黙。

芝 …小さな町だ。

水谷 …ええ、小さな町ですね。

芝 この空き地でね…よく遊んだ…。

水谷 …。

芝 そのころは今よりずっと広く見えた。

水谷 そういったものでしょう。子供の目には…

芝 …こんなに、狭かったか…

水谷 …。

芝 （回想からさめたように）…いや、失礼。つい、昔を思い出してしまって。水谷 いいんですよ。…それじゃ芝さん。

水谷、去ろうとする。  
芝も去ろうとして、

芝 水谷さん。もうひとつお願いしている件…

水谷 手を尽くしています。この町から姿を消した可能性も含めて調査中です。

芝 いや…それはないでしょう。たぶんまだこの町にいる。  
水谷 同意見です。なににせよ、捕まえますよ。久喜玲二を、必ず。

ふたり、別れ別れに退場。

小雪、携帯電話をかけながら登場。

小雪 もしもしもしもし…ああ聞こえた。ゴメン電波悪くて…。え？イヤだから、知りたいたいのね…十六号市有地っていう…え？え？どうしてって…そりゃあ…ちよつとした情報が…え？今、そつち向かってるわよ…え？あんたもこつち向かってる？

民子、携帯電話をかけながら登場。

民子 向かってるっていうか、私はこれからちよつと人と会いに  
小雪 なによつれないわね、小雪さんの頼みも少しは聞いてちよつだいよ  
民子 そんなこと言われても私も忙しいんですから。  
小雪 今日休みじゃないのよ、誰に会つよ、あつ、あんたまさか。  
民子 なんですか。  
小雪 お、おと、おと、おと…  
民子 違います。

中央で立ち止まり、同時に携帯を切る。

小雪 オトコじゃないの？  
民子 シゴトです。しかも相手は女性。  
小雪 色気のない。  
民子 余計なお世話です。  
小雪 日曜日までシゴト。  
民子 お互い様です。それにシゴトは半分、プライベートが半分くらいかな。  
小雪 誰に会つよ。  
民子 小雪さんこそ、十六号市有地の件、どこから聞いたんです？  
小雪 どこからって、まあ、どこからともなく…  
民子 じゃあ私も、誰にもなく…  
小雪 またあ。ニユースソース秘匿はジャーナリストの義務なんだからしよつがな  
いじゃないのよ。とにかく、あたしとしては、その十六号になにができるが知りた  
いわけ。

民子 …。

小雪 なによ、その沈黙は。

民子 偶然ですね。

小雪 なにがよ。

民子 これから会つ人も、たぶんその話しますよ。

小雪 …？

民子 しよつがないから一緒に行きます？

小雪 どこへ？

民子 私の大学の先輩にあたる人なんですけど。

小雪 大学の先輩？ 民ちゃん、大学、地元だったよね。

民子 ええ、その人もずっとこの町に住んでて市民運動やってる人。

小雪 市民運動家？

民子 表だって動かない人だけど、影の実力者なんですよ。介護保険運営協議会の委員もやってるんで、そこはシゴトがらみ。…小雪さん、もしその人が、取材はノ…って言ったらオフレコにしてくれませんか？

小雪 なんか勿体つけるじゃない、いやに。なんて人よ。

民子 小雪さん知ってるかもしれないけど…熊野静枝っていう人。

小雪 熊野？…熊野…。（記憶を探っている）

民子 （時計を見て）ああそろそろ行かないと…。小雪さん、どうします？

小雪 あっ、ちよっと待ってよ、行くわよ、行く！

民子、小雪退場。

路上。山口、松下登場。

松下 どうだ？

佐和子 OKです。地元のマスコミは大小問わず、ほとんど撒きおりました。

松下 よし。これで十六号市有地になにができるのか、公になる。

佐和子 水面下で計画を進めてきた議会のやり方も。

松下 狙いは市長だ。市長の中津川はワンマンだ。この計画も市長の主導権で動いているはずだ。

佐和子 では…

松下 準備にかかってくれ。

山口、松下退場。

熊野静枝の家。民子、小雪登場。  
椅子に座る。

小雪 思い出したッ！ 熊野静枝って…。

民子 なんです、いきなり。

小雪 市長の娘じゃないの。

民子 そうですよ。旧姓中津川静枝。

小雪 現職市長の娘が市民運動の影のリーダー？ なんてそんなおいしいネタをあたしが知らないのよッ？

民子 わたしに怒ったってしょうがないんじゃないですか？

小雪 うつつ…。

民子 マスコミとか、表に出たがらない人なんですよ。だから小雪さん、おとなしくしててくださいね。

小雪 うつつう。

民子 ホラ、静かに。

熊野静枝、登場。

静枝 お待たせいたしました。

立ち上がる、民子、小雪

民子 お忙しいところお邪魔いたします。

静枝 しばらくですね、民子さん。お仕事のほうはいかが？

民子 はい、あいかわらずバタバタしています。

静枝 そう。ご苦労さまです。…こちらは、お友達？

民子 あの、私の知り合いで、美作さんです。

小雪 美作です。(名刺出す)突然、アポなしで押し掛けて、アノ、たいへん、恐縮です。

静枝 ……タウン誌「ひよっこり」…

小雪 ……恐縮です。

静枝 面白いお名前ね。ええ、わたくし、存じています。

小雪 たいへん恐縮…えつ。ご存じですか？ ウチの雑誌を？

静枝 ええ、お名前だけは。残念ながら読んだことはありませんけれど。申し遅れました。わたくし熊野静枝と申します。

小雪 あつ、いや、わたくしこそ、美作小雪と申し…(民子に突つかれる)…あ、いやあ、名前だけでも光栄です、ハイ。

静枝 今日は取材ですか？

小雪 いやあ、その…

民子 美作さんは、十六号市有地について調べてらっしゃるんです。

静枝 まあ、そうなの。

小雪 そうなんです。

静枝 あの空き地…。わたし、あの土地にグループホームを建てるのが夢なんですよ。

小雪 あ…

静枝 ご存じでしょうけれど、わたくしたちの町にはグループホームと呼ばれるものはまだありません。でもね、美作さん。

小雪 ハイ。

静枝 これ、わたくしの持論なんです。グループホームはこれから主流になるべきだと思いますの。

小雪 ハイ。

静枝 加藤さんがお仕事で苦労なさっているように、介護福祉施設は不足しています。全国的にね。そしてこれからも不足し続けるでしょう。

小雪 高齢化社会ですからねえ。

静枝 いいえ、日本は高齢化社会ではありません。

小雪 え、でも…

静枝 六十五歳以上の人口が七%を超えると、それを高齢化社会と呼びます。高齢化しつつある社会という意味ね。それが倍の十四%に達すると、それは高齢化が完了した社会、つまりれっきとした「高齢社会」ということになります。

小雪 ハア、じゃあ日本は…

静枝 日本の高齢化率が七%になったのは一九七〇年ね。十四%に達したのは九四年。七%から十四%を超えるまでに僅か二四年しかかかっていません。同じ変化にイギリスやドイツは五十年、フランスは一世紀以上かかっているのね。

小雪 すこいスピードですね。

静枝 医療の進歩、生活水準の向上、核家族化…いろいろな原因はあるのでしょうかでも結果はひとつ。

小雪 ハイ。

静枝 ねえ美作さん。今まで日本は、たとえば医療保険制度で、わたしたちになにを語りかけていたのかしら。

小雪 …？

静枝 どんなことにもメッセージはあります。たとえば「病気や怪我は治してあげます。元気になって働いてください」というメッセージ。それが健康保険や医療行政の声。「まだまだ働けます。お金を稼げます。日本はもっと豊かになります」という声。日本という国が語りかけてくる声です。でも…

小雪 でも？

静枝 高齢社会になって、働き終えた人たち、働けなくなった人たち、そういう人たちへの声はどんなふうに聞こえているでしょう？「お疲れさまでした？」「どうぞ後はのびのびと生きてください？」そういう声が今の日本の制度から聞こえるでしょうか？…いいえ、聞こえてくるのはいまだに「働けなくなった人間は社会の邪魔にならないところでじっとしててください」という声だけ。ただひたすらに経済成長を目指していた日本という国の過去から、<sup>くだ</sup>餅のように聞こえてくる声です。悲しいことですね…。

小雪 …。

静枝 国という集団は不自由なものです。急速な変化に対して小回りがきかない。でも現状の制度でもできることはあるはず。家族や会社や自分のために働いて、働き終えて、生きてきたことそのものによって心や体をすり減らしてしまった人たち…そういう人たちになにを語りかけるのか…それを考えないといけないと思うの。どうかしら？

小雪 ハイ。正論だと思います。

静枝 わたしなりの答えがグループホームということなの。だから是非実現したかったのだけれど…。どうやら無理なようですな。

民子 無理って…あの、なぜですか？

静枝 あら、民子さん、ご存じないの？

民子 あの、なにを？

静枝 十六号市有地に廃棄物処理場ができるっていうお話。

民子 えッ。

小雪 …。

静枝 あらあら、民子さんらしくもない。新聞ご覧にならなかったの？

小雪 え、新聞？

静枝 地方紙は一面トップよ。

小雪 エッ！

静枝 見出しはね「市に新型廃棄物処理場導入か？」、「第十六号市有地売却を検討」…

小雪 …やられた…。

民子 小雪さん、知ってたの？

静枝 …。全国紙も、地方版には軒並み記事になってるわ。…だから、ね。

部屋部分は暗くなる。  
山口、松下、登場し、松下にスポットが当たる。  
山口、松下にマイクを渡す。  
演説が始まる。

松下  
松下です。ここにいる皆さんはもうご存知とします。一年前のある日、この空き地に建っていたプレハブ作りの小屋が突然取り壊されました。それ以来、この空き地は周囲に鉄条網を張り巡らされ、公有地として放置されてきました。ここにいる皆さんはご存知とします。この空き地の所有者である市は、この土地のある企業に売却する準備を進めています。われわれ市民に知られることなく一年前から密かに進められてきた計画です。新しい技術による超小型焼却炉の運転。すなわち高度な廃棄物の最終処理場の建設です。皆さん、私はこの町で生まれ、少年時代をこの空き地で過ごしました。長い間町を離れ、省みることがなかった。でもどんなときでも、振り返ればそこにこの町があると信じてきました。この空き地には夢があった。この町で生まれ育った皆さんも同じでしょう。私はただ廃棄物処理場をこの町に作ることに、やみくもに反対しているのではない。ただ、われわれ市民が預かり知らぬところで決定されていくこの計画が、ほんとうにその夢を購<sup>あかな</sup>うに足りるものなのか、それを皆さんに問いたい。思いはただそれだけです。…この町に廃棄物処理場を作ることが是か非か、この空き地にわれわれが建てたかったものは、本当にそういうものだったのか、住民投票でそれを問いたい。そのための署名集めを開始します。…皆さんの協力をお願いいたします。

松下、頭を下げる。  
拍手が巻き起こる。

松下、山口、退場。  
(部屋エリアの静枝、民子、小雪は演説中に退場)

床の穴がカバツと開く。  
悦子と小川が顔を出す。

小川 …あー、びっくりした。  
悦子 …。  
小川 いきなり演説始まっちゃうんだもんな。びっくりしたね。  
悦子 …そういうことだったわけか…  
小川 なにが？  
悦子 あんた、ぜんぜん聞いてなかったの？ ゴミ処理場作るんでしょ、ここに。  
小川 こんな狭いところに？  
悦子 最近はね、はやってんの、そういうのが。  
小川 そういうのとは？  
悦子 よく知らないけど、超小型の化学焼却プラントっていつ、最近あちこちでできてるらしいわよ。新技術で、強力なんだって。  
小川 ほづ。  
悦子 ほづって、だいたいあんたなんでこんなところにんのよ。

小川、看板を出す。  
「小川楽器(地下)工房」とある。

悦子 ……ころんでもタダじゃ起きないわよね、あんたも。  
小川 あんたこそね。

悦子 あたし？ あたしはね、商売はどつでもいいのよ。所長さえ捕まえられればこんなところに用はないの。

小川 久喜さん、まだ連絡ないんだ。

悦子 そ。だから…

悦子、看板を出す。

「よろず相談事解決社ノマイティ・ワン分室」とある。

小川 トタテグモか、わしら…。

悦子 意地でも居座ってやる。

後方のドアが開く。

小川、悦子、ハツとして振り返ると、亮子登場。

小川 社長！

悦子 どうしてたのよ、ずっと顔見せないで。

亮子 ……なにやってんの、そんなところで。

小川 あのあと、ここ見つけたんだよ。

悦子 けっこつ広いのよ、中。入る？

亮子 いいわよ。だいたい電気とか来てるの？

悦子 ランプ。

亮子 よくやる…。

悦子、小川、出てくる。

悦子 ねえ、今の演説聞いてた？

亮子 聞いてたわよ。

悦子 どう思う？

亮子 どうって？

悦子 住民投票だってよ。

亮子 どうかしらね…。そんな大事おおごとにはなりそうもないけど。

悦子 そう？

亮子 これが原発とかなら話は別だけど、一応安全と認められてるものだし。

小川 拍手もまばらだったもんな。

亮子 反応はクールだったわね。だいたいホラ、隣の市にもおんなじようなのができてるでしょ。

悦子 え、そうなの？

亮子 去年ね。そっちでは問題なく動いているらしいし。

悦子 くわしいじゃないの、ずいぶん。

亮子 調べたのよ。ちよつとね、キナ臭い感じだったから。

小川 キナ臭いとは？

亮子 この接収の仕方とかね。なんだか急いで土地を確保しようっていう感じだったし…。市役所の友達に聞いたたら、この土地のことでなんだか心配がおかしいって言ってたしね。

小川 気配とは？

亮子 なんていうの、大きさにいえば、陰謀っぽい感じ…

悦子 陰謀？

小川 なにがどう陰謀なの？

亮子 …（肩をすくめるのみ）

小川 …（肩をすくめるのみ）

亮子 …ねえ、悦ちゃん。

悦子 なに？

亮子 久喜さん、まだ連絡取れないの？

悦子 まだよ。音信不通。

亮子 …。

悦子 …それがなに？

亮子 うん。なんか…久喜さん、なんか知ってるんじゃないかな？

悦子 所長が？ なんて？

亮子 ホラ、水谷がさ、やけにこだわってたじゃない。

悦子 …。

亮子 思い出してみて。水谷が最初にここに来たとき。

悦子 …あの頃、ちょうど、所長が…

亮子 そう。久喜さんが姿見せなくなった直後だったでしょ。最初のころ水谷は、この土地云々というより、久喜さんを探して、ここに通ってきてるような感じだったと思わない？

亮子 もし、久喜さんが不意にいなくなったのが偶然じゃなかったとしたら？

悦子 …。

小川 そうは言っても、肝心の久喜さんの居場所がわからないんじゃない？

悦子 名刺…。

小川 え？

悦子 あのと…あの熊野って男…

亮子 ああ、あのセックスレス…

小川 あ、そつえば、あの久喜さんと会ったって言ってたな…。

亮子 じゃもしかしたら手がかりになるんじゃない？ 久喜さん探しの。

小川 そうは言っても、その肝心のセックスレス男の居場所が…

悦子 だから名刺。あの時、あの人が水谷に渡そつとした名刺…あたしが取り上げて…

小川 机の上に、こつやつて…置いて…その後、小屋が壊されて…

小川・亮子 …。

悦子 探して。そのヘンのガラクタに紛れてないかどうか。早く！

三人、そこらを探し始める。

もちろん、おいそれとは見つからない。

亮子 見あたんないわよ。

悦子 ねえ！ あなたの楽器関係のガラクタ、地下室にしまい込んだでしょ。

小川 ガラクタとはご挨拶な。

悦子 下も探して。早く！

悦子、自ら地下室へ。  
追って、小川・亮子も。

明かり変わる。  
民子の仕事場。民子、小雪登場。

小雪 ねえ、ちょっと待ってよ。民子ちゃんてば。  
民子 だからあ、私は忙しいんですけど。

小雪 その忙しさがなんかネタにならないかしらあ。

民子 人事だと思っで…。とにかく人手は足りないし、お金は足りないし、施設もケアマネージャーもヘルパーもなにもかも足りないし、もうホント、介護保険のおかげで…

小雪 ケアマネって足りないの？ けっこう資格取ってる人いるんじゃないの？

民子 仕事がたいへんな割りに給料が…っていう声もありますねえ…。まあ、そういう人ばかりじゃないんだけど…

小雪 歯切れが悪いわね。

民子 まあねえ…。パートパートで見ると、一概に言えないんだけど…。運用する側から言えば、もう少し国に責任持って欲しいって感じかなあ。

小雪 ほほう。

民子 今まで、介護っていつか老人福祉って国が面倒見てたんですよ。いろいろ問題はあったけど、まあ税金でやってたわけ。それが保険になって相互扶助形式になって、お金を集めるのは市町村、事務手続きも市町村、ちょっとさぼってませんかって言いたくなるわね、正直言っで。

小雪 なるほど。

民子 そりゃあ、補助金とか交付金とかで地方の面倒見てくれるのも国なんだけど…。でも地方にはお金的な自由ってあんまりないんですよ。地域の面倒は地域でっというなら財政の自由もないと。結局、首根っこ押さえられてヤリクリだけしてる感じ。

小雪 辛いとこね。

民子 こっちがそれに慣れちゃってるところもあるんですけどねえ。十六号市有地の話にしたって、ホラ、補助金が出るでしょ。

小雪 ああ。

民子 こついつちゃんただけど、市長がそついつの弱いから…。

小雪 中津川市長？ ねえ、そつ言ええ、あの人、市長の妻の娘なわけでしょ？

民子 熊野さん？ ええ、そう。

小雪 考えようによつちや凄い構図よね。

民子 静枝さんはそついつの全然気にしてないみたいですよ。

小雪 だつて父娘の争いなわけじゃない。

民子 勝負にならないでしょう。市議会で決まっちゃええね。

小雪 あれは？ ほら例の住民投票。

民子 ああ。市役所は今のところノータッチですね。万一本当に住民投票をやることになつたら別ですけど。

小雪 やつぱり可能性薄い？

民子 無理じゃないかしら。もともと関心薄いみたいだし…、もし署名の数が規定数に達しても、市議会で否決されることは間違いないし。

民子 だから役所でもあんまり真剣に受け止めている人はいません。

小雪 やっぱりそうか…。

民子 どうかしました？

小雪 うん、いや、その住民投票の請求代表人やってるっていう…

民子 ああ、ええと、松下…

小雪 そう、それ、松下信夫。

民子 それが？

小雪 なんか…知ってるような…知らないような…

民子 へえ…。

小雪、考え込む。

民子 あの、小雪さん？

小雪 …。

民子 私、もつ行きますよ。

小雪 …。

民子、退場する。

小雪、我に還る。

小雪 あつ、民子ちゃん！ ちょっと待ってよ！

小雪、追って退場

熊野家。静枝登場。

佐和子登場。

佐和子 お休みのところ押しかけて恐縮です。山口佐和子と申します。

静枝 熊野静枝です。

佐和子 住民投票の件でお願いに上がりました。ぜひ熊野さんのお力添えをいただきました  
いんです。

静枝 署名、しましたよ、私。

佐和子 ありがとうございます。でもそれだけじゃないんです。熊野さんはこの町の市  
民ネットワークで指導的な役割を果たしていらつしゃいます。署名が規定数に達  
した後、住民投票を成功させるためには、熊野さんの力が必要なんです。

静枝 そんなに買いかぶられても困ってしまいますけれど…ええ、わたしにできること  
なら協力はいたします。でも…本当にできますか？ 住民投票。

佐和子 できます。有権者の五十分の一の署名を集めれば市長対して住民投票条例の制  
定を請求することができます。法律はそう定めています。

静枝 でも…

佐和子 ええ。実際問題として五十分の一程度では話になりません。わたしたちが目標  
としているのは全有権者の四割の署名。

静枝 三万六千…ぐらいかしら。

佐和子 ええ。正確には、三万六千七〇九。

静枝 ……  
 佐和子 つまり現市長が市長選挙で得票したのと同じだけの署名を集める…それが最低ラインの目標です。  
 静枝 そう…。  
 佐和子 廃棄物処理場の建設を推進してきた中津川市長…あなたのお父様ですね。  
 静枝 ええ。  
 佐和子 それを承知でお願いにあがっています。非常識なのは承知のうえです。  
 静枝 (微笑む) そんなこと構いません。わたくしも、ずいぶん非常識な女ですから…お座りになれば？

佐和子、座る。

静枝 山口さん。住民投票の請求代表は確か…

佐和子 松下と言います。私たちの運動のリーダーです。

静枝 あなたをここに来させたのも？

佐和子 ええ。

静枝 松下さんがわたくしに会って説得しろとおっしゃったのかしら？

佐和子 そうです。

静枝 松下さんは、わたくしのことを誰から？

佐和子 そこまでは存じません。

静枝 そう…。でもだいたい見当はつきます。

佐和子 ……

静枝 わたくしのことを一番よく知っている人ですね、きっと。性格から…なにからなにまで…。

佐和子 ……

民子の仕事場、民子、小雪登場。

小雪 まったく逃げ足の速い…

民子 逃げ足とは失礼な。小雪さんが物思いに耽ってらっしゃったんじゃないかもしれませんこと？

小雪 物思いは中止。ネタ探し再開。

民子 だから…なにもありません。それこそ静枝さんのところにも行ってみたらいいのに。

小雪 申し込んだわよ、取材。住民投票についてのお考えをインタビューさせていただけませんか？

民子 そしたら？

小雪 丁重に断られましたね。

民子 やっぱり。

小雪 ガード固いわあ。

民子 奥ゆかしい人ですから。

小雪 なんか皮肉に聞こえるんだけど？

民子 あら、耳がいいんですね。

小雪 民子ちゃん…あのね、

小雪の携帯が鳴る。

民子 ホラ、お電話。

小雪 ……まったくもう…。(電話に)ハイ美作。…なんだ、大沢さんか…なに? 今取材中…え?…え? ええッ!

民子 ……(大声にびつくり)

小雪 マジ?!

熊野邸。

静枝 ……山口さんは、松下さんとは長いおつきあいなの?

佐和子 ええ、長いですね。

静枝 とてもよいパートナーシップをお持ちのようね。信頼していらっしゃるのね。

佐和子 信頼していますし、それ以上に尊敬しています。パートナーという言葉ではあらわし切れないくらい…。…。

静枝 そう。同志なのね。

佐和子 ええ、古い言葉ですけど、その通りです。

静枝 共に背中を合わせて戦える仲間はなによりも得難いものです。

佐和子 ……熊野さん、もし私たちが、三万六千を超える署名を集めることができれば、そのときは共に闘っていただけませんか?

静枝 共闘ですか…。それもまた懐かしいコトバね。

佐和子 熊野さん。

静枝 ……もしあなたの方が、三万六千以上の請求署名を集められたら、その後はどうなさるおつもりかしら?

佐和子 請求が市議会で可決される可能性はほとんどありません。ですから当然の流れとして…。

静枝 山口さん。

佐和子 ……。

静枝 佐和子さん、とお呼びしてもいいわよね? いいお名前ね、とつても。…ええ、わたしバカじゃありませんからそのくらいわかります。請求が否決されればその時は市長をリコールする、それが筋と言つものものです。

佐和子 それでも…。

静枝 ええ、父は父、わたしはわたしですから。

佐和子 そういつて下さると思つていました。

静枝 市長をリコールし、市議会を再編成する。その上で改めて、議員提案として住民投票条例を通す、それから…。

佐和子 それから…夢を実現するんです。

静枝 ……それはあなたの夢かしら?

佐和子 わたしの、松下の、そして、あなたの夢でもあるはずですよ。

静枝 ……でも佐和子さん。小型焼却炉を使った分散廃棄物処理システムは、全国的な流れです。それに逆らうような署名がそれほどたくさん集まるのかしらね?。

佐和子 新しいシステムだからこそ、慎重にならなければいけないんです。

静枝 そうね。おっしゃる通りね。でも想像力だけで危機感を持つことは難しいことです。せめてそれが目に見える形で示されればいいのだけねど…。

佐和子 わたしは……わたし達は、危険を嗅ぎ分ける市民の嗅覚を信じています。  
静枝 そう。では、わたくしもお約束いたします。もしあなた方がほんとうに三万六千以上の請求署名を集めることができたら、あなたがたに全面的に協力いたします。

佐和子 ……。

静枝 そのように松下さんにもお伝えください。

佐和子 はい…伝えます。

佐和子、一礼して退場。

民子の仕事場 小雪、民子登場。

小雪 ……うん、…うん…わかった…。どうもありがとう。こっちでも調べてみるから…

それじゃ…(電話切る)

民子 なにかあった？

小雪 噂をすれば影だね…。

民子 なんのこと？

小雪 ……隣の市に、例の新型焼却炉が導入されているの、知ってるでしょ？

民子 ええ。去年だったかしら？ こっちで導入する予定のと似たような…。それがどうかしたんですか？

小雪 事故った。

民子 え？

小雪 汚染ガスが漏れて、大騒ぎになってるみたい。付近の住民が三十人近く、病院に運ばれたんだって。重態も何人かいるらしいわ。

民子 ……。

小雪 とにかくあたし、一回事務所に戻るわ。

民子 あ、ええ。…ねえ、小雪さん、これって…

小雪 ……えらいことになるわよ、きっと。

小雪退場。

民子退場。

部屋のなかで何事か物思いにふける静枝。

暗転。

## ACT 4 野原の選択

路上。亮子登場。追って芝登場。

芝 中山さん。

亮子 (立ち止まる) ……はい？

芝 突然にどうも。私、こういうものです。

亮子 (名刺を受け取る) インターナショナル・ミドラー・インテグレイテッド…。

芝 日本法人の代表をやっております、芝昌男と申します。以後お見知り置きを…。

亮子 ……

芝 少しでもお時間よろしいですか？

亮子 でかけるところだったんだけど…どんなご用かしら？

芝 手短に言います。中山亮子さん。大変優秀なシステムエンジニアリングの

キャリアをお持ちだ。いかがです。ウチでプロジェクトをひとつ漕いでいただけ

ませんか？

亮子 ずいぶん唐突なヘッドハンティングね。しかもこんな路ばたで。

芝 現在フリーということで、ご自宅に伺おうと思っただけです。

亮子 誰から聞いたのかしら、私の住所。

芝 それはもう、いろいろと調べさせていただきましたので。

亮子 あたしはね、大企業にはもううんざりしてんのよ。それにしてもミドラーって

えは…

亮子 はい。

亮子 例の空き地にできるっていつコミ処理場に、お宅の焼却炉が入ることになってるんじゃなかった？

芝 まだ決まっていますね。

亮子 隣町じゃ大変な騒ぎになってるみたいだけど？

芝 あれはウチの炉じゃありません。

亮子 ライバルが一步後退してめでたしってことじゃないの？

芝 そんなことはありません。こつこつ市場の立ち上げの時期にああいう事故を起こされると、競合他社もとも打撃をこつこつむる事になります。

亮子 それ、本音かしら？

芝 現にあの事故で、無視できない事態が持ち上がることが予想されています。

亮子 住民投票？

芝 お察しの通りです。

亮子 あの空き地について、あたしもまんざら無関係じゃないけど…。もし住民投票が実現して、あの土地を買い取ることができなくなったら、おとなしく引き下がるの？

芝 土地が買えない限り、処理場の建設は無理です。が…

亮子 が？

芝 中山さんとお話したいのは、その件とは別件です。

亮子 別件。ああ、そう。

芝 中山さんは確か、以前に市の福祉関係の仕事に関わっておられましたね？

亮子 ええ。介護保険の波の飲まれて立ち消えになったけど。

芝 今度はもつと大規模な仕事です。やりがいもある。  
亮子 内容は？

芝 そう…ひと言で言えば…介護保険システムをゼロから作り直すんです。  
亮子 ……どういうこと？

芝 現段階であまり詳しくはお話しできないのですが…。つまり現行の制度の枠内では十分な福祉行政をおこなうことができないと考えているのです。

亮子 ……

芝 介護・福祉システムは、社会的なセーフティネットとして今後あるべき姿を探っていくことになるでしょう。その第一歩が曲がりなりにも今回の介護保険制度と一応は言えると思います。が…

亮子 ……

芝 その制度はあまりにも国家の都合に染められ過ぎている。煩雑な手続き、コストダウンをはかるための認定システム、財源確保の不安定性、そしてなにより、中央集権性が強すぎる。現システムは中央のさじ加減ひとつで、認定の基準や保険給付のレベルが変えられるように設計されています。相互扶助主義の名の下に、地域に介護の面倒を見させながら、その実、手綱は中央が握っている。ちよつと待ってよ。そりゃ正論かもしれないけど…

芝 この先、人びとの意識が変われば制度は徐々に変わっていくかもしれない。しかしそうでないかもしれない。そうでなかった場合のことを考えたいのですよ。待つて。考えたいって、誰が考えたいの？ あなたの話の主語は誰なのよ。

芝 それはもうじきわかります。わたしたちは人材が欲しい。この町に理想的なセーフティネットを張り直すための人材がね。

亮子 ……話の要点が見えないわ。なんだか、独立国でも作るうっていうおとぎ話に聞こえるけど。

芝 ある意味では。現行のあらゆる制度に反せずに、現行の国による行政を骨抜きにし、その上にこの町独自の理想的なセーフティネットを張る。わたしたちの目標はそういう事業です。

亮子 そんなこと…一企業のできることじゃないんじゃないの？

芝 おっしゃる通りです。ポイントを突いていますね。

亮子 ……

芝 権力が必要ですね。それも既存の政党や利害から自由でいられる権力。この小さな町を動かせるだけの、ちつぽけな権力…。それを手に入れられれば、可能なことです。

亮子 主語は誰？ 誰が手に入れるの？

芝 ……今はまだ。

亮子 言えないってわけ？

芝 そつですな。

亮子 それじゃあこつちも乗れないわね。

芝 (頷いて)一言だけ言えることがあるとすれば…。

亮子 ……

芝 ……十六号市有地に関する住民投票は実現します。われわれは廃棄物処理システムの建設を断念することになるでしょう。そのかわり少し違う希望を手に入れることになるでしょう。

亮子  
…。

芝  
…。  
いかがですか？ 詳しいお話をさせていただきませんか？

亮子、退場していく。  
亮子、後について退場。

山口、松下、登場（別々の場所）

山口（携帯電話（こちら山口）…うん。十二号街頭署名終了しだい、八号車に合流して。別の携帯が鳴る（ちよつと待って。はい山口。十一号終わった？…ちよつと待って。地図を見る）…じゃ、地区の戸別訪問に回って。…そう。すぐ！え？ 先週行った？…もう一度行く！ 来週も行く！ 感良好な場合はその場で署名の受任者を依頼する…そう！ ネズミ講方式で行く…以上。

松下…（別の場所て携帯電話をしきりにいじっている）

山口（別の携帯（もしもし。十二号車？ 合流は？…急いで！ 八号車は手が足りないから！ 以上！）切る。また別の携帯が鳴る（はいこちら山口！

なあ。iモードってどうやって見るの？

山口 松下さん！ そんなことやってる場合じゃないでしょ！

松下 でもさ、ホームページやってるんだろ、署名アピールの。

山口 そんなの今さらあなたが見てどうするんです！ だいたいその携帯は「フォンです！

松下 そうなの？ 「フォン」っていうのはiモード見れないの？

山口 まったく！ 機械音痴なんだから！（別の携帯が鳴る（はい山口！…ああ待ってたわ。で、集計は？

松下…（まだ携帯をいじくっている）

山口 ホント？ それホントね？ 了解！（切って、もう一方の携帯に（松下さん。松下さん？

…（携帯をいじくっているため、声が聞こえない）

山口 松下さん！

松下（遠く空から声が聞こえる。キョロキョロしてから携帯を耳に当てる）…ああ、山口。あかさ、「フォン」てのはね…

山口 三万六千突破しました！

松下…。

山口 松下さん？

松下…今なんて言った？

山口 三万六千を超えたんです、署名が！

松下…。

山口 松下さん。（声が涙声になる）

松下 気を引き締める、山口。これからだぞ。

山口 ええ、わかっています。

松下 手を緩めるな。集められるだけ集めるんだ。

山口 はい。

松下 多ければ多いほど、議会にとって後々のプレッシャーになる。

山口 わかつてます。  
 松下 情報もすぐ流せ。相乗効果があるはずだ。  
 山口 もう左手でやってます。  
 松下 よし。また報告をくれ。俺は次の根回しにまわる。  
 山口 了解。  
 松下 山口。  
 山口 はい。  
 松下 ……やったな。  
 山口 ……涙が溢れてきて、発作的に携帯を切ってしまう。一方の携帯に「こちら山口。すぐマスコミ各社に連絡…！」  
 山口、退場。  
 松下 ……

水谷、松下のそばに登場

水谷 届きましたか？  
 松下 ……。(黙って頷く)  
 水谷 もくろみ通りですね。  
 松下 水谷。  
 水谷 はい。  
 松下 お前の仕事はどうなってる。  
 水谷 それが…  
 松下 言い訳はいい！  
 水谷 は。申し訳ありません。いまだに居場所がつかめずに…  
 松下 勘のいい男だ。  
 水谷 もうしばらく時間を…  
 松下 もついい。  
 水谷 しかし…  
 松下 たぶん久喜は自分から出てくる。  
 水谷 ……  
 松下 俺がこの町に戻って来た以上、貸しを取り立てにくる。それまでのあいだに…。  
 水谷 ……  
 松下 お前、まだ地検にコネがあるな？  
 水谷 はい。  
 松下 逮捕状がおりにするようにしておけ。  
 水谷 ……いや…それはしかし…確かに過去に一度、傷害致死の容疑を受けたことはあります…その時は証拠不十分で…  
 松下 聞こえなかったのか。  
 水谷 ……  
 松下 久喜玲二の逮捕状をとるんだ。そしてそのことは俺以外の人間には言うな。  
 水谷 ……わかりました。  
 松下 もう行け。  
 水谷 は。

水谷一礼して、退場。  
 松下、去りかけると、かすかに女の泣き声が聞こえる。  
 松下は足をとめ振り返る。  
 幼女が叫ぶように泣いている声が聞こえてくる。  
 地下室の蓋がゆっくりと上がり、中からかすかな光がもれる。  
 泣いているのは子供のココキだ。

松下 ……ココキ…。

ココキ (泣きつつも、自分を勇気づけるために唄う) (x x x) (自分の歌が怖くて

泣く) 怖いよおー…！

松下 ……じゃ唄うなよ…。

ココキ みんなどこ行ったの？ ねー！ ねえってばあー…！ レージくーん！

…マサオくーん…！…えーと…

松下 忘れんなよ。もう一人はノブオだ。

ココキ 出てきてよおー。いじわるしないでよおー！

松下 がんばれココキ。俺たち少年冒険隊はいつだって…

子供のレイジが闇の中に浮かび上がる。

松下 ピンチをチャンスに変えるんだ！

ココキ ……誰？…誰かいるの？

松下 俺たちはいつだって一緒だ。

ココキ 誰？ レージくん？ マサオくん？…それとも…

松下 さあ、涙をふいて。これから冒険だ。冒険グッズの用意はいいか！

ココキ、小さなキーボードを出す。

松下 よーし。

レイジ、ずっしりと重そうな、黒光りする拳銃を出す。

松下 (びびりつつも) よ、よーし。

ココキ ……すごい。それ、本物みたい…。

松下 うん、すごい。わかった。わかったから、もつしまえ。

レイジ、拳銃をかまえたまま、じっと狙いを付けている。

松下 だから、しまえよ。しまえってば。

ココキ ねえ…なんだか…こわいよ。

松下 しまえよ。…しまえって言うてんだろ。

レイジ、撃鉄を起す。

松下 ……。

ココキ やめて…。

レイジ、じっと松下を狙ったまま動かない。

ココキ ねえ、やめて。やめて。やめて。…やめてえーッ！！

暗転。  
小雪の部屋。夜。  
寝ていた小雪が飛び起きる。

小雪 あー…。びっくりした…。…変な夢…。

後ろの暗がり、久喜がいる。

小雪 …あ、頭いた——あー、…飲み過ぎた…

久喜 夢じゃないよ〜ん。

小雪 ぎエツ。

小雪、びっくりして飛び跳ねる。

小雪 だ、だ、だだだだだ…

久喜 不用心だなあ…。いくら酔ってるからって、鍵ぐらいかけるよ。

小雪 誰よあんた！

久喜 久しぶりだなあ、小雪。

小雪 久しぶりって、あんたなんか見たことも…

久喜 聞いたことぐらい、あるだろ？

久喜、床にあつた小さなキーボードをとり上げて、「ひよっこりひよつたん島」テーマのサビを弾く。

小雪 …。

久喜 昔から持ち物の趣味が変わんねえなあ。

小雪 …。あ…あ…、あんた…

久喜 正解。思い出した？

小雪 レージ…マサオ…もう一人は…ノブオ…

小雪 …。そうか…松下信夫…って…。思い出した…！

久喜 そう、昨今話題の第十六号市有地ってのは、俺たちがこ幼少のみぎりに探検した、あの野原さ。

小雪 …。

久喜 そこへ突如として還ってきた問題児松下信夫くんのおかげで、とりあえず雲隠れしなきゃいけなかった可哀相な俺よ。同情して。

小雪 ……どういうこと……だってあなたは……あの……つまり……

久喜 あー、いい、いい。順を追って説明するからさ。とにかくここじゃなんだし、着替えて来いよ。俺、外で待ってるわ。

小雪 あ、ねえ、説明って？

久喜 とにかくよくわかんないことが多くてさ。あの空き地で遊んだ俺たち四人のなかで連中が探してるのは俺だけで、お前のところにはなんの動きもない。どうもよくわからん…。

小雪 ……？…？ 動き？ 連中？

久喜 まあいいから。ゆっくり話そう。場合によっちゃお前に頼みたいことができるかもしれないし…。なんつっても二十八年ぶりだしな。

久喜退場  
小雪退場

路上。  
悦子、小川、スパイ風に登場。

小川 (新聞を見ている) …悦ちゃん。悦ちゃんや。

悦子 なによ。

小川 これ見た？

悦子 なにが。

小川 えらいことになってますがな。

悦子 なんなのよ、そのメガネは。あんた老眼？ 磯野波平じゃないんだから。

小川 やっぱ新聞読むときはメガネでしょう。

悦子 なんだってのよ。(新聞奪つ) …住民投票条例案提出。今日審議へ。

小川 結局、四万集まったんだってよ、署名。すげえよね。そんなに人いたのかね、この町。

悦子 いるわよ、そのくらい。有権者の四十八パーセント…か。確かにすごい数よね。ちよっとしたブームだったもんなあ。

悦子 タイミングがよかったのよね、結局。

小川 なにが？

悦子 事故よ。隣町で同じタイプの新型焼却炉が事故って大騒ぎしたでしょう？

小川 ああ、そんなことあったなあ。でもあれって違う会社のだったんじゃないかって？ 関係ないのよ、そんなこと。要するにあの技術はまだ未完成だっていう証拠が、一番ショッキングな形で出てきちゃったわけじゃない。それで署名運動に火がつ

いちやっただけでしょ、結局。

小川 住民投票があ…。そんなの俺はじめてだなあ。

悦子 …あんた、新聞ちゃんと読んでる？

小川 なにが？

悦子 住民投票やるって決まったわけじゃないのよ。住民投票っていうのはね、あくまでも住民投票しますっていう条例を議会が通さなきゃできないわけ。署名っていうのは、そういう条例を作ってくださいってお願いしただけでしょ。だから「今日審議へ」って書いてある。だからそれが通らなきゃ駄目なわけ。

小川 ほっほう。で？

悦子 で…ってなによ。

小川 通らないの？

悦子 通さないでしょうよ。だって処理場作る計画を進めてたのは当の議会の連中じゃないの。これ通して、本当に住民投票やったら…署名数四万人よ、結果は見えてるでしょ。住民投票を目指す直接請求は現在、二十九件連続否決されている、って、ホラ「今日のコトバ」に書いてありませんがな。

小川 …じゃあ結局なにも起こらないわけ？ 否決されたら。それってむなしくない？

悦子 むなしいのはこっちよ。

小川 こないねえ。

悦子 …ったくなにやっつてのかしら亮子さんてば。

小川 せっかく熊野さんの名刺出てきたのにな。

悦子 まあ、いいけどね、勤め先わかったから。

小川 あのビル？

悦子 そ。もう乗り込んだじゃおうか？ 亮子さんこないから。

小川 そうねえ…。

水谷、登場。

水谷 おや？ おやおやおや。

小川 水谷。

悦子 出た…。

水谷 これはこれはどうもご無沙汰しております。水谷です。

悦子・小川 どうも。

水谷 ずいぶん珍しいところでお会いしますねえ。なにか、お待ち合わせですか？

小川 いやあ、

悦子 べ、別に。

水谷 そうですか。それはそれは。ところで日月さん。久喜さんからなにか連絡が？

悦子 …いいえ。

水谷 そうですか。いや、それならいいんです。

悦子 まだなにか？

水谷 いやあ、ご心配でしょう。いったいどうなされたんでしょうねえ。

悦子 さあ。

水谷 まあ、いずれひょっこり現れるかもしれませんな。…それじゃあ、またいずれ。

悦子 あ、ちよつと…

水谷 はい？

悦子 どうして所長を探してるんです？ もう用はない筈でしょう？ あの空き地だったもう…

水谷 ああ、あの空き地は……………どうなるんでしょうねえ。

悦子 …。

水谷 ……そうそう、先ほど市議会で、住民投票を求める住民の直接請求に対して、議決

悦子 ……結果は？

水谷 ……四対四。否決です。……………それじゃ。

悦子 ……結果は？

水谷 ……四対四。否決です。……………それじゃ。

水谷、退場。

小川 否決かあ…ってことは。

悦子 てことは？

小川 どうなるんだらう。

悦子 ……さあ。

小川、何事かに気づいて、悦子をつつく。

悦子 痛いなあ。なに？

小川 ……さあ。

悦子 ……さあ。

小川の指す方向に、熊野周平登場。

小川 ミスター・セックスレス。

悦子 見つけた…。  
小川 どうする？  
悦子 当たって砕ける、よ。…ん？

ドレス姿の熊野静枝登場。  
夫婦は連れだつて歩いていく。

悦子 あれ…奥さん？

小川 ザ・セックスストレス。

悦子 無理矢理複数形にしてんじゃないわよ。

小川 どうする？

悦子 当たって砕ける…前に、あとつけて見よつか…？

退場する夫婦のあとを追つて、悦子、小川退場。

別の場所。松下、山口、携帯電話を持って登場。

松下 松下だ。

佐和子 山口です。否決されました。

松下 よし。準備はできてるな？

佐和子 万全です。

佐和子 すぐにとりかかってくれ。…市長リコールだ。

松下、山口、退場。

路上。

熊野夫妻登場。

追つて悦子、小川もあとをつけて登場。

静枝 ねえ、わたし、ある人と約束したんだけど…。

熊野 なに？

静枝 この前の住民投票の署名で、父の市長選のときの得票数を越えたら、その人たちに協力するって…

熊野 そうなんだ。

静枝 その人たちつて、周平さん、知ってらっしゃるんじゃない？

熊野 さあ、どうかな。

静枝 まあいいわ。ですからわたし、やってみようかと思うの。

熊野 うん。

静枝 若くて自信にあふれてて、ちょっとバカっぽいかかって思うくらいに単純で…。でもまっすぐで気持ちいい人たちの。だからわたしもくすぶってないでちょっと冒険しようかなって思う。

熊野 いいじゃない。賛成。

静枝 (笑う)

熊野 なに？

静枝 なにをやってみるか聞きもしないで賛成？

熊野 うん。そういえばそうだ。なにをやるの？

静枝 知ってるくせに。

熊野 予想はつくけど。  
 静枝 じゃあ当たるかどうかお楽しみ。  
 熊野 静ちゃん、ちよつと先行つててくれるかな。  
 静枝 いいわよ。遅くなる？  
 熊野 ならないと思う。  
 静枝 じゃあね。

静枝、去りかけて

静枝 あなたのプレゼントってね…

熊野 え？

静枝 まわりくどくって素敵。

熊野 …。

静枝、手を振って退場。

熊野 …あの、なにかご用ですか？

悦子 (近寄ってきて) 毎度、よろず相談事解決社マイティ・ワン分室です。

小川 同じく小川楽器地下工房です。

熊野 ああ…

悦子 ご記憶でしょうか。今を去ること早一年…

熊野 いやあ、その節はどうも…

悦子 見れば奥さんとも仲直りのご様子。

熊野 ええまあ…

悦子 それはたいへんけっこうです。実は今日は熊野さんにお伺いしたいことがあります。

熊野 为什么呢。

小川 いまだにセックスストレスあ痛て。

悦子 実はですね、あのときコタコタしてつやむやになっちゃったんですけど、熊野さん、久喜玲二を知ってるって言うてましたよね？

熊野 はい。

悦子 今どこにいるかわかりませんか？

熊野 さあ、それはちよつと…

悦子 この町にいるんですかね？

熊野 ああ、それは当然この町にはいるでしょう。

悦子 当然？

熊野 だって…ああ、そうか…

悦子 は？

熊野 なにもご存じじゃないんですね？

悦子 というと？

熊野 全部彼の考えたことですよ。

悦子 ……なにが？

熊野 あなた方のいた、あの空き地のことですよ。住民投票や、その他いろんな出来事も、全部。ずっと以前に私、聞かされたことがあるんです。ずいぶん面白いことを考える人だと思って…それですつと覚えてまして。

悦子 ？？ え？ え？

熊野 だからこの町には、いるはずですよ。

悦子たち、言葉が見つからない。

熊野 正直言つて、ちよつと理想論過ぎて、現実味に欠けるかなつて、最初に聞いたときは思いました。でも久喜さんはとてもパワーのある方ですね。ねばり強く準備を積み重ねて、とうとう実現してしまつた。だからわたしもお役に立てるならと思つてお手伝いをするにしましたんですよ。

悦子 お手伝い？ じゃやっぱり熊野さん、所長と一緒になにかやってるんじゃない…

熊野 いやいや。わたしは詳しいことはなにも知りませんし、僕自身はなにもしていません。ただ許可を出しただけで…

悦子 許可…

熊野 ですから僕も楽しみにしてるんですよ。この町の成り行きを。この町が住みやすい、いい町になってくれるといいですよ。

悦子 …。

熊野 実は彼女も…家内もどつやら一役買つことになつたみたいで。前よりもちよつと明るくなつた感じなんで、僕もなんか…、いやあ、いい感じなんです、最近。

悦子 いや、いい感じって、あの…

熊野 あの空き地に、彼女はグループホームを作りますよ、必ず。それを最初にして、他にもたくさん。介護が必要なお年寄りのための施設は、その町の小・中学校と同じ数だけあるべきだ、っていうのが彼女の持論なんですから。

熊野、ニコニコして話しているが、照れたように

熊野 …いや、なんか身内の話ばかりしちゃつてすみません。とにかく、わたしが彼について知っているのは、それだけのことなんです。どうもお役に立てなくて。それじゃ。

熊野、丁寧に一礼して退場。

悦子・小川 …。

悦子 なに？…なんの話？

小川 …？

暗転。

## ACT5 ただ栄光のためでなく

ミドー社系列のビル、亮子の新しい仕事場。  
亮子、グリーンを表紙のファイルを読んでいる。  
芝登場。

芝 いかがです？ われわれのプランは。

亮子 信じられない… っていう感想をいかにも期待しているようなプラン、ってところかしらね。

芝 まだ青写真ですが…。

亮子 要するにこういうこと？ 例えば法律に沿って介護認定受けてもらう。そして介護認定の結果のいかんに関わらず、本人が必要とするすべての介護サービスを給付できるようにしてしまつ。そつすることで介護認定という制度を有名無実化してしまつ…。

芝 要介護レベルの認定制度というのは、つまるところ給付のハードルを上げて、保険料を安く抑えるための方策に過ぎないと我々は見えています。相互扶助を謳うのなら、必要なときに必要なだけ供給されるサービスでなければならぬ。

亮子 ごもつとも。

芝 保険の給付を受けるためには介護認定を受け、要介護度の判定を受けなければならぬ。これは制度上動かしたい事実です。要介護度のランク付けとは、その人間を介護するために必要な時間の長さから割り出されている。しかし介護に必要な時間などというものは、はっきりいえば毎日変わるのですよ。

亮子 (資料のページをめくって) それで、再認定の申請からランクの再設定までの一連の手続きをパッケージ化して自動的にやっつけてしまおうってわけね。

芝 このシステムが出来上がれば、被保険者はなにひとつ意識せず、一日おきに要介護度への不服申し立てをしている状態になります。全ての被保険者の要介護度が、リアルタイムで見直されるのです。…まあこういった仕掛けが他にも無数に準備されることになりませう。

亮子 こんなシステムを実行したらどれだけのお金がかかるのかしら？

芝 当初は莫大な出費が予想されますが。

亮子 回収できるの？

芝 (肩を竦め) まず会社をいくつか作ります。それをとりまく形で財団法人をいくつか、民間非営利団体をいくつか配置します。このNPO法人は福祉関係だけでなく、発電や交通など、多岐にわたります。

亮子 全部、もとをたどればミドーに行き着くわけ？

芝 その財源のみでシステムが運用されるのは遠い先のことでしょうが…

亮子 それまではミドーがご用立てしましょうってわけだ。

芝 中山さん。それら全ては、最終的にはこの町の市民へと還るのですよ。ですから献金や出資金も、たったひとつの条件に拘束されるのです。すなわち、市民であること。この町に生まれ、住み、働くものであること。

亮子 一企業が…

芝 はい。

亮子 一企業が、地方公共団体の住民から税金をとるっていうことね。

芝 あなたは見込んだ通りの方だ。物事の捉え方が実に本質的だ。  
亮子 とてももとがとれるとは思えないわ。ミドリーなんの得があるの。

芝 ひとつの商品が完成するまでは、それがどんなものであれ、金はでていくので  
す。利益があがるのは商品ができたあとのことです。

亮子 町ひとつがまるごと商品見本だってことね。

芝 正確に言えば町を動かすシステムが、です。

亮子 国や政府つてものを無視するやり方ね。

芝 とんでもない。これは国家の権力、とくに地方政府という限定された範囲の権力を絶対の前提としたシステムです。古来、企業と権力と結びつきは、とかく醜いものが多かった。しかし我々が目指すのは貪る結びつきではない。寄り添う結びつきです。

亮子 ……理想論、ね。

芝 ええ、まさにその通りです。

亮子 国家政府の裏をかくようなマネを地方政府が議会ぐるみでやって、合法性が保てるかしら？

芝 地方公共団体はどんなに小さくともひとつの政府です。政府が出す条例は法律であり、法律が合法的でないことは定義から言っておりえない。問題は法律同士が矛盾する場合、つまり地方の法律が国家の法律と対立する場合だけです。が…

亮子 が？

芝 こういつてはなんです、我々企業ほど法の網の目を探り出しそれをかいくぐる術に長けたものはいない。いままでに繰り返し返されてきた政・財・官の癒着の歴史は……このためのエクササイズだったと思えばいいのです。

亮子 ……(降参というように両手を上げる)

芝 中山さん、あなたの個人事務所「有会社コエ」……。名前の由来を当てましようか。

亮子 ……

芝 ……ユルティム・エスポワール。フランス語ですね。意味は…

亮子 ……「最後の希望」。

芝 我々のプロジェクトは、まさにあなたにふさわしいと思いませんか？

亮子 (大きくため息) そこまで信頼しあえる権力が存在するとは思えないけど…。

松下登場。

松下 存在しなければ作ります。

亮子 ……

松下 (芝に) 否決だ。

芝 そうか。うまくいったな。

松下 ああ、予選はクリアした。

芝 いよいよ本戦だな。

水谷登場。

水谷 失礼します。…遅くなりまして。

水谷、中山に無言で会釈する。

亮子 (思わず笑いをもらす) そう、そういう構図なわけか…。

芝 中山さん、我々はこれで…

亮子 次のステージは市議会選挙、ってわけね。ええどうぞ、お構いなく。

芝 中山さん、念を押しておきますが…

亮子 わかっているわよ。仕事を受けたからにはクライアントの守秘義務は守るわ。

芝 それを聞いて安心しました。

亮子 聞いとかなないと気持ち悪いから聞いてちょうけど…、隣の焼却炉の事故は…あれはヤラセね？

松下・芝…。(目配せ)

水谷 不肖水谷の仕事です。

芝 事故そのものは本物です。あの処理場のエンジニアを買収したんですよ。本人も入院中ですが。まあ死人が出そうになってちよつと慌てましたがね。

亮子 で、退院したあかつきにはミドラーに迎えて優遇する…？

芝 まあ…はつきり言えば餓い殺しです。我々は我々の金にこるぶ人間を信用しない。

亮子 ご立派。金で雇われてる身には沁みるお言葉ね。

芝 それでは…。

男三人退場。

亮子、ポケットに手を突っ込んで、立ちつくしている。

退場。

野原。

静枝登場。演説が始まる。

静枝

みなさん。わたしは熊野静枝と申します。現在わたしたちの町では、市長及び市議会リコールのための署名運動が繰り広げられています。それは元をたせば、ここ、皆さんが今立っていらっしやるこの空き地になが建つのか？ 長い間空き地のままに放っておかれたこの場所に、なにを作ることがわたしたち市民の意志なのか？ それを問うことから始まったのです。皆さん、わたしは今まで長い間この町で市民活動に微力を尽くしてきました。その活動を通して連帯したたくさんの仲間たちに対し、今、こつ呼びかけたいと思います。このちつぽけな土地は、市の持ち物です。市はここを、産廃処理業者に売却しようとしています。でも皆さん、市の土地であるということはどういうことでしょうか？ 市の持ち物であるということは、それはわたしたち全員の、わたし達市民全員の共有物であるということなのです。この狭い空き地、わたしたちが、こんな土地はどうなってもいいと思うなら、ここはなんの意味もない空虚な場所のままです。でも、こんなちつぽけな土地でも、ここはわたしたち市民全員の夢を託せる場所にすることができるとしたら、みなさんはどんな選択をするでしょう。わたしは今まで、主に福祉問題をとりあげて、市民の皆さんと話し合い、考え、手探りで未来を探してきました。ですからわたしの持論はみなさんご存知だと思います。もし、市議会リコールが成立し、議会が解散したら、わたしは立候補するつもりです。そしてこの土地の売却に関する住民投票を議員提案により実現し、……近い将来、この土地に、新しい介護施設を建設することを、市民の皆さんにお約束したいと思います。

拍手。  
静枝退場

人気のなくなった野原の地下入口がぱかっと開く。

小川 ……あー…びっくりした。

悦子 なんていつもあたしたちがここに入ってる時に限って演説会が始まっちゃうワケ？

小川 嫌がらせですかね。

悦子 それにしても、なんか大事になってきたわね…。

小川 あの人、立候補するわけ？

悦子 そうみただけど…でも、それはリコールが成立して、議会が解散したらってことですよ？

小川 リコールってことは…？

悦子 また署名合戦が始まるわけよね…。

小川 今度は何人集めりゃいいわけ？ リコールってのは。

悦子 リコールってことは…そりゃあ、あんた、大変なもんよ…  
小川 知らないわけね。

久喜がドアから入ってくる。

久喜 有権者の三〇パーセント。

悦子 そう、三〇パーセントよ。

久喜 それでも市長が辞職しなけりゃ解職投票で決着。

悦子 そういう…こと…よ。

小川 ……。

悦子 ……。

久喜 もうちょっと勉強しとけ。

小川 久喜さん！

悦子 ……所長…！

久喜 あああ、声がでかい。

悦子 いったいぜんたい今まで…なんだって今ごろ…ここなんかこんなに…(…いっぺんにいろんなことを言おうとして痙攣している)

久喜 いいから落ち着け。吸ってから吐け。それができてからしゃべれ。吐くときにしゃべれ。

悦子 ……。

久喜 くださいま。

悦子 くださいまじゃないですよ！

久喜 じゃあ…なに？

悦子 なに…？もう！ もうもう！

久喜 もーもー言うとなになるぞ、って子供の頃言われなかった？

悦子 言われません！

久喜 高広、涙拭け。

小川 全然泣いてません。

久喜 餅、食う？

小川 いりません。

久喜 あそつ。  
悦子 (呼吸を整え終わった) 所長、ひとこと申し上げますけどね、だいたいあなたは  
勝手過ぎやしま…  
久喜 ちよつとコレ。  
悦子 なに。  
久喜 餅。持ってて。  
久喜、地下室入口を引き開ける。  
悦子 所長？  
久喜 おまえら、よく見つけたなあ、ここ。  
悦子 ちよつと所長。  
久喜 しーッ。ちよつと待ってて。

久喜、地下室に姿を消す。

悦子 …。(小川の顔を見ている)  
小川 …。(餅を見ている)

久喜、出てくる。手には古い木箱を持っている。

久喜 あつた…か。  
小川 なんです、それ？  
久喜 俺が昔かくした。  
小川 その箱を？  
久喜 そう。  
小川 なにがはいってるんです？  
久喜 …うん。まあ、今は知らなくていい。  
悦子 所長。  
久喜 ん。  
悦子 説明してください。  
久喜 …。  
悦子 所長。  
久喜 お前は、どう思う？  
悦子 なにがです？  
久喜 ここに、危なっかしいゴミ処理場を作るか。理想の福祉施設とやらを作るか、それとも…。  
悦子 …。  
久喜 おまえだつてこの町の住人だ。どうしたいか意思表示する権利がある。どうしたい？  
悦子 …わかりません。  
久喜 そうか…。  
悦子 …。  
久喜 でも、知りたいです。どうなるのか、他の人がなにを考えているのか。なにも知らないままになにかが来て、そしてなくなつて、ここになにが建っていたのかも、すぐに忘れて…。そんな繰り返しになるよりは…。選べないかもしれないけど、なにが選択肢なのかは、知りたいです。…そう、思います。

久喜 …。高広。

小川 はい。

久喜 餅、食う？

小川 ……。

久喜 長いな。迷うなよ。ほれ、食え。

小川 いただきます。

久喜 ……そつだな。ここにこの箱があるってことは…そついうことなんだろうな…。

悦子 …。

久喜、静かにしゃべりだす。

久喜 事のおこりは、もう十年も前だ。…俺とアイツはたったふたりで、ここにあった

小屋に…この地下室に潜んでいた。

悦子 あいつって…

久喜 ……突然この町に舞い戻ってたった一年の間に住民運動を組織し、市長をリコールに追い込んで今まさに市議会に打ってでようとしている男だよ。

悦子 松下信夫…。

久喜 ……十年前、ある事件があって、身をかくす必要があった。それであいつはここに潜んだ。俺たちはここで別れ別れになり、それ以来一度も顔を会わさなかった。…あいつは…天才だったよ。組織作りも、戦闘の作戦指揮も。人を率いるために生まれてきたような男だった。

悦子 戦闘って…

久喜 もう死語かもしれないけど。いわゆる過激派ってやつだ。

悦子 所長が？

久喜 まあ…若気のいたりってやつ？ 俺たちの世代がたぶん最後尾さ。もう世の中は見向きもしない時代に入ってた。でもあいつは…ずっと同じ事を考えてきたんだろうな。バカみたいに。世の中を変えようってホンキで思って思って、それでこの町に帰ってきたんだ。…今回の絵は一から十まであいつの描いた絵さ。俺には一目でわかるよ。

悦子 ……でも…廃棄物処理場の計画は…市議会とかが進めてたわけで…

小川 それが偶然のチャンスだったってこと？

久喜 違う。あいつは偶然に頼るような計画は立てない。処理場の計画そのものがプランの一部なんだ。

悦子 まさか…

久喜 だって熊野が一枚噛んでるんだろう？

悦子 熊野って…今度市長になるって…

久喜 いや、ダンナのほうだよ。

小川 セックスレス。

悦子 しつこいわね、アンタ。…ダンナって熊野周平。

久喜 そつ。その男はな、熊野御堂家っていう日本の古い財閥の次期総裁だぞ。ザイバツ？

久喜 今じゃ熊野兄弟社っていう小さな親族会社が残ってるだけだな。一方で世界中で羽振りをきかせてるミドー・インテグレートっていう資本グループがある。穀物、石油、原子力、なんでもありの大企業だ。お前だって名前くらい知ってるだろ。

小川 ……（頷く）

久喜 どんな連結資産表を見てもカケラも痕跡はないけどな、ミドー・グループってのは、日本の熊野御堂家の持ち物なんだよ。…あいつはどこかで…たぶん芝罘男を通じて熊野と知り合っただろう。そして自分の計画に引き込んだ。廃棄物処理場の誘致を市に持ちかけ、一方でそれを暴露し、住民投票を指揮し、さらにその勢いに乗って市長をリコールし市議会を掌握する。自分と自分の共鳴者たちを議会に送り込み、この町に自分の理想を実現する…。

小川 そんなごつついのがバックについてんなら、なにもそんな回りくどいことしなくても…

久喜 あいつが求めているのはただの権力じゃない。民衆に支持された権力。そうじゃなきゃ意味がないんだよ。

小川 はあ…そういうもんですか。

久喜 そういうもんなの。

悦子 ……で…どうするんです。

久喜 ……。

悦子 このまま放っておくんですか。

久喜 放って置いてなぜ悪いんだろっ。

悦子 ……だって、いくら理想が高かったって、こんなやり方…どうかおかしじゃないですか！

久喜 お前の言うとおりだ。だけど少なくとも俺は頭のなかのどっかで、あいつのやり方としてることを肯定してる、よくぞやってくれたと思ってる自分がいる。

悦子 でも…

久喜 わからないのは、どうしてあいつがこの町を選んだかってことだ。ここに俺がいて、ここにこれがあることを知っていて、それでもあいつはこの町に戻ってきた…。

悦子 その箱、なにが入ってるんです。

久喜 ある事件があつて身を隠す必要があつた、そつ言つたる？

久喜、箱を開く。

箱の中には、油紙にくるまれた一丁の回転胴式拳銃。

久喜 そのとき、この銃で人がひとり死んだ。…だからたぶん…そつなんだろっな。

悦子 所長？

久喜 つぶそう、あいつを。久喜玲二を。

悦子・小川 ……。

久喜 お前ら、ちよつと働いてもらつけど、いいか。

小川、頷く。

悦子はじつと黙っている。

小川 ……悦つちゃん。

悦子 熊野さんに会つたとき…

久喜 ……。

悦子 この計画は全部…久喜さんが考えたことだつて…あの人はそう言つてました。  
久喜 ……。

悦子 そうなんですか？ それ、ホントなんですか？  
久喜 …。

悦子 それともあの人が嘘ついてるんですか？  
久喜 …。

悦子 一年前所長は、ちょっと二、三日でかけるから、そのあいだ事務所見とけって  
言っ、あのドアからふらつと出ていってそれっきり帰ってこなかった。あのと  
きあたし言いました。あたしはただのアシスタントですから、相談事なんてとて  
もじゃないけどできません、て。そのとき所長なんて言ったか覚えてますか？

久喜 …

悦子 お前は自分で思ってるより人を見る目があるからだいじょうぶだ。自信もってい  
けて…。あたし、ちょっと嬉しかった。…あれは本気で言ったんですか？

久喜 ああ。

悦子 もしホントにあたしにちょっとでも人を見る目があるなら…、いいえ、たとえ全  
然そうじゃなくても…あの熊野さんが嘘をついているようにはどうしても思え  
ない。

久喜 …。

悦子 あの人の言ってることは本当なんですか？

久喜 …。ああ、嘘はついてないな。

悦子 じゃあ…所長は…

久喜 だけど本当でもない。本当でもあるし、嘘でもある。

悦子 わかりません。

久喜 その件に関しては今はそれだけしか言えない。悪いけど我慢してくれ。

悦子 …。

久喜 頼む。

悦子 …（頷く）

久喜 よし、じゃあ俺はしばらくこの地下室で作戦を練る。方針が固まったら指示を出  
すから、それまで待機だ。いいな。

悦子・小川 オウッ。

亮子登場。

亮子 なんか楽しそうな話してない？

悦子 亮子さん！

小川 忘れた頃にやってくるやつ。

久喜 よう社長。

亮子 よう所長。…戻ってきたんだ。

久喜 いいタイミングで来ること。

亮子 アラそつ？ お楽しみに間に合ったかしら？

久喜 もちろん。

四人、地下室に入る。

ある場所（プレス・ルーム）  
小雪登場。

小雪 (電話している) もしもし、ああ、あたし、出たわよ、市長選・熊野静枝、当確。市議会議員・松下信夫、当確。山口佐和子、同じく当確。手分けしてインタビュー行つて！　すぐよ！

小雪退場。

別の場所(記者会見場)。

水谷登場。

水谷 水谷です。ええ、選挙管理委員会は本日、議会の承認を受けて、住民投票の準備に入ることとなります。…はい。第十二号市有地を産廃処理場とするかどうか、そして新市長から新しく提案された、同市有地に新介護施設を建設するか否か、投票にかけられるのはこの二点です。新市長は、この投票の結果を最大限に尊重すると言明しております。…はい。それでは忙しいのでこれで。…水谷でした。

水谷退場。

市役所内。

民子、前が見えないほどの資料を抱えて登場。  
忙しげに歩く民子を呼び止める芝、登場。

芝 加藤さん。

民子 はい？　今ちよつと手が離せないんですけど…。

芝 わたくし、こういうものでして。

民子 (名刺を受け取り) 芝さん…。福祉・介護包括整備委員会…？

芝 新市長の公約にもありましたとおり、これから市を上げて、完璧な福祉・介護の地域サービスプログラムを作ってまいります。そのお手伝いをさせていただくこととなりますので、よろしく。

民子 …。

芝 これを。

民子 これ…。

芝の渡すグリーン・ファイルを開いて目を通す。

芝 ざっとした青写真だけです。もちろんまだ部外秘です。

民子 …(素早く目を通していく)信じられない…。

芝 でしょうね。

民子 無理に決まってるわ。だって、こんな…

芝 こんな計画を実行する予算はどこを振ってもでてこない…ですか？

民子 …。

芝 それが、出てくるんです。打ち出の小槌を手に入れたんですよ、この町は。

民子 …でも…これは…。

芝 おっしゃりたいことはよくわかります。そのプランは、国による介護保険の中央集権性を潜り抜け、完全に補完するためのプランです。言ってみれば、国家による統制を逃れ、独自の福祉ネットを張りなおすためのプラン。

民子 これって…

芝 より攻撃的な言いかたをすれば、これは…独立福祉国家の建設プランです。

民子 あなたは…市民全員を犯罪者にするつもりなの…？

芝退場。

追って民子退場。

別の場所（市議会会議場）。  
スーツ姿の佐和子。

佐和子

（演台のようなところから）悪法も法である限り守らなければならない。それは確かに正論です。でももし我々にもっと知恵と力があれば、悪法に抵触せずその網の目をかいくぐる事ができる。それはひとつの選択です。そしてひとつの意思表示です。介護保険を含む福祉政策が、不完全なものとしてわれわれの目に映るのならば、その不完全さを、補える力がわれわれにあることを、信じようではありませんか。（手にしたグリーンファイルをかざしてみせる）…ここに現行の介護保険制度を遵守しつつ、それをより公正で、暖かい、地域に完全にフィットした福祉行政をおこなうための、新たな十一の条例案を提案します。この条例案は、合法性に関しては完璧にチェック済みであり、かつ、国が張った不完全な保証の網の上から、より完全な地域セーフティネットを張り直すための知恵が凝縮されたものです。

拍手。

佐和子退場。

熊野家。

静枝、その後ろから水谷、会話しながら登場。

静枝 財政の独立。すべてはそこにかかっています。

水谷 はい。

静枝 どうして地方自治体が、政府であるにもかかわらず、自分達の意志で自分達の暮らす町を作ることができないのか。それは財政の独立がないから…。百も判りきった議論ですね。

水谷 しかし、正論です。

静枝 わたしは…将来、町を企業に売り渡した市長として、永遠に汚名を残すかもしれない。ませんね…。

水谷 いいえ。日本ではじめて、本当の自治権を確立した首長として名を残されるでしょう。

静枝 …飯にそうでも…私は栄光はいらない。ただ…

水谷 ただ…。

静枝 …いいえ…なんでもありません。主人は…あの人は…まだ帰りませんね。

水谷 これからお忙しくなるでしょうから。市長の夫としても、ミドリー社の次期総裁としても…

静枝 あの人は、ミドリーを率いる気はないようです。本家の親族会社だけを継ぐつもりですよ。

水谷 しかしその熊野御堂家だけが、世界中のミドリーに対して統帥権を持っている。これからはその全てが味方につきます。究極の打ち出の小槌ですな。目先の利益などは考えない、日本に新しい自治体を根付かせるための事業…それが熊野御堂家の跡取である熊野周平の本懐でしょう。

静枝 あの人は…たぶん、そんなことは考えていない。

水谷 …。

静枝 あの人は、たぶん……自分もあの野原で遊びたかったんでしょね…。

静枝退場

水谷の携帯が鳴る。

別の場所で電話をかけている中山亮子が明かりの中に浮かぶ。

水谷 はい水谷…。ああ、どうも。…なにか？…はい。…はい。（顔が真剣になる）間

違いありませんか。わかりました。感謝しますよ。では…。（携帯切る）

亮子退場

芝登場

水谷 芝さん。捕まえましたよ。久喜玲二です。

芝 …。

水谷 中山亮子から報告がありました。例の空き地です。

芝 …行きましょう。

水谷、芝退場

野原。

足早に、芝と水谷が登場

あたりを見回す。

地下室の蓋をあける水谷

小雪がぬつと現れる。

小雪 イヤイヤイヤイヤ…。

水谷 …。

小雪 せまい！子供の頃はメチャメチャ広く感じたんだけどなあ。

亮子登場

亮子 そついつもんよね。

民子登場

民子 そついつものですよねエ。

思わず嘆息する芝。

小雪 お互い成長したっていうか、年とったモンよねえ、マサオくん。

芝 …（すっかりシラケきっている）まったくだよ。

民子 こんにちは、芝さん。

芝 どうも。こんなところでお目にかかれるとは思いませんでしたよ。

小雪 人数多い方が安全だって、隊長がいうもんだからさあ。

水谷 中山さん、見事にハメられたようですね。

亮子 いえいえまだこの程度じゃありませんことよ。

亮子、小型のテープレコーダをかざす。

テープからの声 「…(亮子) 退院したらミドラーで高く雇う？ (芝) まあ…はつきり  
言って餓い殺しです。我々は我々の金にころぶものを信用しない…」

芝 (もはや苦笑のみ) クライアントの守秘義務はどこへ？

亮子 残念ですけどね、あの時点で私のクライアントは久喜玲二だったわけ。

芝 わたしが声をかけた時、すでに逆スパイだったわけですね？

亮子 それどころか、水谷さんがここへ最初にくるよりも前。久喜さんが姿を隠すと  
き、私にある程度のことを話していったのよ。そのあとはまあ臨機応変。

芝 …所詮は過激派崩れか。何年たってもやり口が変わらない…。で？ それだけで  
はないんでしょう？ まだコマが残っているようだし。

亮子 さすが芝さん。わかりが早い。

小川 テープのコピーを持って隣町の病院まで約二名が出張中。

芝 やれやれ。

亮子 あんたたちにそのかされた事故の責任者、これ聞いたらどう思つかしら？

民子 そろそろ戻ってくるころね。

ジャラーンとギターが鳴り、手作りギターを抱えた小川、登場。  
かき鳴らす情熱的なギターの調べ。しかしそのギターに弦はない。  
後ろから、ラジカセでギター曲を流しながら悦子も登場。  
悦子、テープをとめる。

小川 ただいま参上。

悦子 ただいま。(ゼイゼイ)…まにあった…。

民子 お疲れさま。

亮子 首尾は？

小川 上々。なんかスゲー気弱なアンチャンだった。これ聞かせたら全部しゃべって  
くれた。(テープを亮子に返す)

小川 やったじゃない。

民子 そのほうがもし裁判になったとき有利になるからね。

亮子 その話、録音してきたわね？

悦子、ラジカセ・オン。

ジャララーン、とギター曲。  
急いで弾くマネをする小川。

民子 それはもういいの。

悦子 だってー、ダビングしてる暇なかったし、唯一の証拠品じゃないのよ。

小川 安全のため、所長に渡してきました。

水谷 もうけっこう。お遊びはそのくらいにしてもらいましょう。久喜玲二はどこです？

悦子 …(肩を竦める)

水谷 日月さん、彼に対して逮捕状が出ていることを知っていますか？

小川・悦子・小川 逮捕状？！

水谷 久喜玲二が武装左翼セクトに所属していた十年前、グループ内の内紛の際に、同  
グループのメンバーを射殺したという容疑です。あなたの気持ちはわかります  
が、そういう人物をかばうことはあなたにとって…

芝 水谷さん。

水谷 はい。

芝 それは久喜玲二に対する逮捕状ですか？

水谷 ええ。

芝 それは松下の指示ですか？

水谷 (あたりをはばかりように) 芝さん。

芝 そうなんですわね。

水谷 …。

芝 …あの…バカが…

水谷 …。

芝 …最初からこうなるとわかっていたのか…

水谷 は？

芝 水谷さん、私、帰ります。

水谷 どういうことです。

芝 …隠し通すつもりなんかなかったのか、あいつは…。

水谷 芝さん。

芝 あなたがたが松下信夫と呼んでいる男。あれが久喜玲二なんですよ。

水谷 はあ？

芝 (説明が面倒だといわんばかりに) あとはその…美作小雪さんにも聞くんですね。

小雪 二十八年ぶりに会ったっていうのに素っ気ないわねえ。ここで×××振り回して遊んでたくせにさ。

芝 …いいから。

小雪 松下信夫っていう…住民投票のときリーダーだったあの、あれは久喜玲二よ。間違いないわ。この空き地で一緒に遊んだ仲。それで、あんたたちが所長って呼んでる人、あれが松下信夫。

悦子 う…そ。

小雪 嘘じゃないわよお。だってモチ好きでしょ。

小川 好き。

小雪 それがノブオくん。新しく市議会議員になったのがレイジくん。そいでこの人がマサオくん。

芝 …十年前に訳あってお互いの名前を取り替えたんだそうです。

民子 そんなこと…

亮子 …そんなことできるの？

小雪 日本で、自分を本当に証明をできるのは戸籍だけなんだった。だからそれさえ操作できればあとはどうにでもなるって言ってたわ。

小川 戸籍なんて操作できるの？

芝 常識的には無理ですが…ああいう連中に常識を求めてもむなしだけでしょ。非合法組織のコネクションから戸籍ブローカーを使い、書類を操作すれば身分の入れ替えは可能です。

小川 なんか…住んでる世界が違う気がする…。

小雪 ただのモチが好きなおじさんじゃないの。この空き地で遊んでたころと変わんない。いまだに子供っぽいごっこ遊びが好きなだけ。ちっとも変わりゃしないわ。それについては同意見。…それじゃ、失礼。

芝 後を追って水谷、去ろうとする。

亮子 あ、ちょっと。これ。

亮子、テープレコーダと、小川の返したテープを水谷に渡す。

水谷 …。

亮子 あとは久喜さんが持つてる病院のテープだけ。それと久喜さんから…あ、本当は松下さんなのか、まあとにかくこつちの所長からの伝言。テープはどうするつもりもないから返す。ただし松下信夫本人に直接渡すことが条件。そう伝えといて松下さんに。

水谷 …。  
以上。…ああ、疲れた。それじゃ、まあ、解散！

女たち+小川、退場していく。  
テープを手に呆然としている水谷、あわてて、退場。

芝 (最後に退場しようとしている民子に) 加藤さん。

民子 はい？

芝 あなたは惜しいとは思わないんですか？

民子 なにがですか？

芝 …中央の思惑に振り回されず、等身大の、地域に寄り添った福祉社会。それをも分たちの手で実現するこれ以上のチャンスは、もう永遠に訪れることはないかもしれないんですよ。

民子 芝さん。自分たちの手っておっしゃいましたけど…、それはわたしのこの手のこととおっしゃっているんでしょうか？

芝 …

民子 そんなことがやりたいわけはないのに、それでも老人をベッドに縛り付けなければならぬ介護労働者の手のことですか？ 善意で自分の診療所を介護施設にしようとして、認可をとるために役所をたらいまわしにされて寝不足になりながら病院を切り盛りしてるお医者さんの手のことですか？ それとも、大きな力で国や法律を動かせるような、誰のものでもない、かじかむことも、汗をかくこともない、そういう手のことですか？

芝 加藤さん、わたしたちが考えているのは…

民子 制度や法律を作っているのはわたしたち自身で、それを変えていくのもわたしたちだと、わたしもそう思います。でも…国や法律は、わたしたちの夢そのものになることはできないんです。

芝 加藤さん、あなたは…

民子 ええ、わたし、悲観主義者です。悲観主義者が、つまらない規則に振り回されながら走り回ったり、どつしよつもないしがらみに泣いたりしながら歩いていく先に…いいえ、歩いていくといふことそのものが、わたしにとっては最後の希望です。

民子、頭をひとつ下げて、退場していく。  
芝、退場。

別の場所。  
松下登場 追って山口登場。

佐和子 松下さん。本当なんですか。

松下 ああ。

佐和子 松下さんがやめるなら私も辞めます。

松下 ダメだ。

佐和子 ダメでも辞めます！

松下 山口、お前に残ってもらわないと困る。

佐和子 松下さんにやめられたら私が困ります

松下 お前は優秀だ。俺がいなくてもやっていけるよ。

佐和子 …… 最初からそのつもりだったんですか。

松下 ……。

佐和子 ここまで作りあげて…。自分は最後に消えてしまっ…。それが松下さんのやり  
たいことだったんですか？

松下 ……十年前、俺とあいつはこの町で別れた…。いつか借りを返したいとは思って  
いた。

佐和子 だからこの町を選んだ…？

松下 俺がこの町でやるつもりを知ったら、あいつはやってくるかもしれない  
い。もしかしたら、俺と一緒にまた闘ってくれるかもしれない。そう思ったこと  
もあったよ。

佐和子 じゃあ…じゃあ私は？ 私は松下さんの同志にはなれないんですか？

松下 お前は…同志だったし、同志だ。だけど…

佐和子 …… 言うてください。はっきり言うてください。

松下 お前は…夢だ。俺がいなくなっても、俺が作ったものを育ててくれる…。そうし  
て欲しいと思ってる。

佐和子 …… 松下さんは…

松下 ……

佐和子 警沢ですね。

松下 そうだな…。

佐和子 私は松下さんの…夢ですか…。

松下 …… (只頷く)

佐和子 人の夢になるのも… 楽じゃありませんね…。

稍沈黙。

松下 山口。

佐和子 あとは頼んだぞ。

松下、退場。

佐和子 …… はい。

山口、退場。

熊野家の夕。

熊野登場。窓の外を眺めている。

静枝（洋装）登場。

後ろから熊野に肩掛けをかけてやる。

熊野はニコリと微笑む。

静枝、熊野に寄り添って窓外を眺める。

静枝  
…周平さん。

熊野  
なに？

静枝  
あなたのお友達…だいじょうぶかしら？

熊野  
うん。

静枝  
それならいいけど。

熊野  
静ちゃんの友達はだいじょうぶ？

静枝  
ええ。みんな元気よ。

熊野  
そう。ならいいね。

稍有って、

静枝  
お休みなさい、周平さん。

熊野  
お休み。

熊野と静枝、左右に分かれて退場。

野原。

松下登場。懐かしむように見回している。

地下室のドアを開ける。

懐中電灯でのごく。降りていく。

久喜登場。

開いている地下室の入口の傍らにしゃがみ、餅を食っている。  
登ってくる松下を見下ろす。

松下  
…。

久喜  
…。（黙って手を差し出す）

松下、久喜の手を握って、穴から這い出す。

久喜  
…久しぶり。

松下  
…うん。

久喜  
…市議会議員どの…か。

松下  
ああ。

久喜、しばらく黙っているが、くつくつと笑い出す。  
松下も、笑い出し、二人は大笑いする。

やがて笑いやんで。

松下  
小雪は…元気なのか？

久喜  
ああ…、地元のタウン誌の編集長だ。

松下 あいつ…臆病だったなあ…

久喜 ああ。

松下 唄…覚えてるか？

久喜 ああ。

松下、久喜、うる覚えで、「ひよっこりひょうたん島」を唄う。

久喜 マサオは…一緒にやってるんだな。

松下 ああ。あいつも今じゃ立派な…

久喜 …立派な？

松下 立派な背広野郎さ。

小さく笑うふたり。そして沈黙。

久喜 この空き地の夢をときどき見るよ。

松下 …。

久喜 その夢のなかで、おれはお前になってるんだ。リーダーになって、みんなをひっぱっていく…。その夢のなかでは、おまえが俺で、モチを片手に一番後ろからもくもくと突いてくる…。

松下 モチはいいよ、おれは。

久喜 (かすかに笑って)……どうするんだ？ これから。

松下 …。

久喜 俺にどうしてほしい？

松下 …。

悦子、小川、登場

悦子 久喜さん…。

松下が振り向く。

久喜は振り向かない。

久喜 …あのふたりに、隣の病院まで行ってきてもらった。

松下 おまえの仲間か？

久喜 そういったもんだ。

松下 いいな。楽しそうだ。

久喜 事故を起こした処理場の責任者に会ってきてもらった。このテープは…

松下 わかったよ。もういい。

久喜 …。

悦子 お金をもらってやったって…。事故を起こさせたのは、ミドリの代理人で…この町の住民投票運動に火をつけるためだって…そう…言ってた…。

久喜 …悦子。もういい。

悦子 …なんで…なんでそんなことするの？ …なんで…そんなことまでしなきゃならぬの…

小川、涙をこぼす悦子の肩を支える。

松下 おまえが決めていい。



松下 …。  
久喜 この町に戻ってきてすぐ、この銃のありかを知っているおまえが、唯一の証拠品を始末しなかったのは、そういう意味なのか。俺にそう伝えるために、この銃をそのままにしておいたのか。レイジ！… 答えろ！

松下 …。  
久喜 答えてくれ。俺は… 本当にこれで… 俺の役目はこれであっていいのか…？

松下 は… リーダーの指揮通りに、行動できたのか…？ 教えてくれ。

久喜 … ノブオ。おまえが俺に名前をくれたおかげで…

松下 …。  
久喜 俺は思うようにやってこれたよ。… もうじゅうぶんだ。

松下 …。  
久喜 … ずつと、狙っててくれよ。俺の背中を。おれがこの野原から消えるまで。

久喜 レイジ…！

松下 頼んだぞ、ノブオ。

松下、振り返らずに歩いていき、退場。  
久喜はピストルを青い空に向け、撃つ。  
空虚な銃声とともに、暗転。

\*\*\*

そこは猫の額のような、広くて狭い空き地。  
古ぼけた写真のような、懐かしい記憶の中で、  
たくさんの少年冒険隊員たちが、  
思い思いの道具を手に、  
遠くて近い秘密基地を目指して、  
野原を探検しつつ進んでいく。

音楽とともに  
幕。